

京都府埋蔵文化財情報

第93号

豊饒の井戸—糞尿と稲の儀礼—	岩松 保	1
共同研究 古代日本海沿岸地域における土器様相の比較検討(上)	筒井 崇史	13
	村田 和弘	
	松尾 史子	
平成16年度発掘調査略報		29
1. 門戸古墳群		
2. 木津川河床遺跡第16次		
3. 上人ヶ平遺跡		
府内遺跡紹介 99. 奈具遺跡群		35
長岡京跡調査だより・90		37
センターの動向		39

2004年9月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

豊穰の井戸 — 糞尿と稲の儀礼 —

岩松 保

井上社別名御手洗社

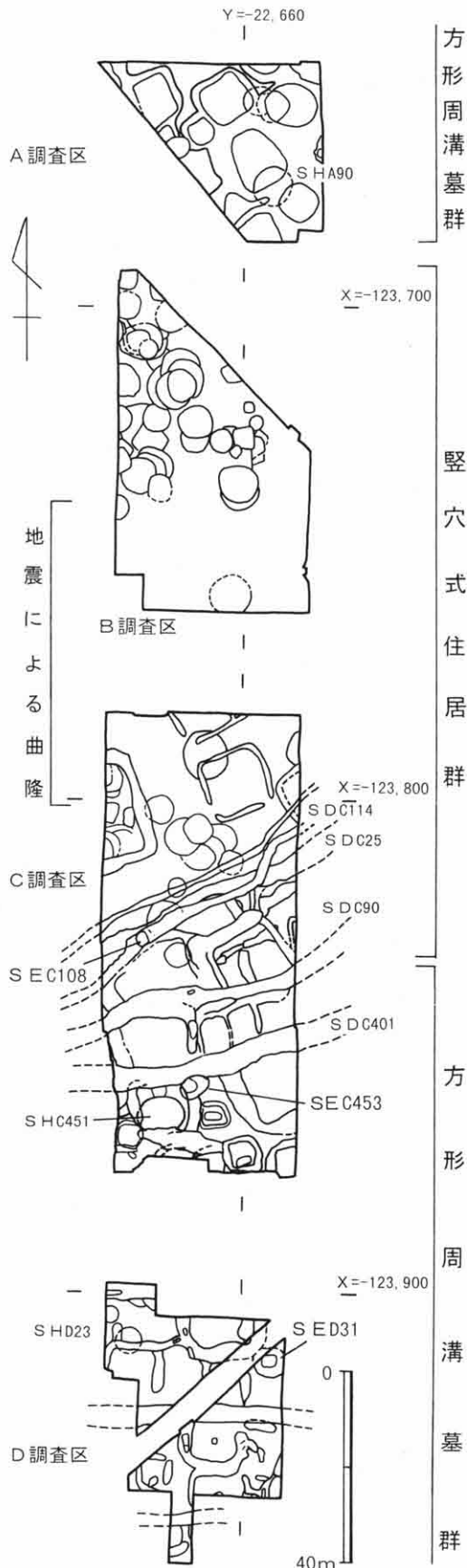
〔(前略)また、井戸の井筒の上に祀られたところから井上社と呼ばれるようになった。賀茂祭(葵祭)に先だつ齋王代の御禊の儀はこの社前の御手洗池で行われ、夏の風物詩土用の丑の日の足つけ神事、立秋の前夜の矢取りの神事はともに有名である。土用になれば、御手洗池から清水が湧き出ること七不思議の一つにも挙げられ、池底から自然に吹き上がる水泡をかたどったのが、みたらし団子の発祥と伝えられている。〕(『下鴨神社内井上社』案内板より)

1. 問題の所在

京都府久世郡久御山町市田齊当坊遺跡では、弥生時代中期の井戸を2基調査した。特に、C調査区で検出した井戸S EC453は残り具合が良く、四辺に縦板を立て並べて、それらを隅柱にほぼ結合した横棧で固定しており、この時期の日本国内では類例を見ない構造であった。この井戸の系譜については、『市田齊当坊遺跡 京都府遺跡調査報告書』第36冊の中で、高野陽子調査員が詳細な検討を行っている(高野2004)。筆者も同調査員らとともに現地調査に携わり、井戸内堆積土層の解釈や井戸の使用時の形態——降下取水式井戸の構造について大いに議論した。

さて、この井戸S EC453の埋土を分析すると、寄生虫卵・イネ穎が多量に検出され、ある段階で、トイレもしくはゴミ穴として利用されていたことが判明した。^(注1)井戸S EC453で寄生虫卵・イネ穎を含んでいた土層は、井戸廃棄直後の埋戻し土と判断される土層であった。井戸使用時と判断される堆積土についても寄生虫卵分析を実施したが、砂質が強いため、動植物遺体は遺存しておらず、^(注2)井戸S EC453使用時にトイレとして利用していたのかどうかは特定できなかった。そのため、土層の堆積時期の解釈より最低限言えるのは、井戸廃棄時の埋戻し土には糞尿やイネ穎が大量に混じり込んでいるという事実だけである。一方、井戸S EC453周辺に分布する弥生時代中期の大溝S DC25・90・401や布留期の井戸S EC108からは、寄生虫卵は全く見つからなかった。この事実を保存環境により寄生虫卵が破壊されたと考えるのか、はたまた、糞尿により汚染されたのは井戸だけと考えるのか、議論が分かれるところである。大溝S DC25・90・401の埋土中には寄生虫卵は遺存していないが、花粉化石は遺存しているので、これらの遺構では、寄生虫卵だけが破壊されたと考えるのは無理であろう。

高野陽子は、井戸S EC453廃絶直後の層位から寄生虫卵が検出された事実を「早い段階に廃棄土坑として二次的に利用されていることを示している」と判断した上で、井戸S EC453をはじめとして各遺構より玉作りや石器製作の関連遺物が多量に出土することから、この井戸を、生活用



第1図 市田齊当坊遺跡遺構配置図
 (『市田齊当坊遺跡報告書』より再トレース・加筆)

水の確保及び玉作りを中心とする手工業生産を効率的に行うための用水を確保した井戸と考えている(pp. 170-171; 以下引用ページ数のみは「市田齊当坊遺跡報告書」より)。

筆者は、これらの井戸は生活水や手工業用水を汲み出すためのものではなく、儀礼用の水を探るための「神聖視」された井戸であったと考える。その儀礼とは、まさに豊穰を祈念するための農耕祭祀である。

この小論では、『記紀』、『風土記』をひきながら、古代人の井戸に対する観念を検討し、井戸 S EC453を中心とした井戸の意味を考えたい。

2. 理化学分析結果と井戸

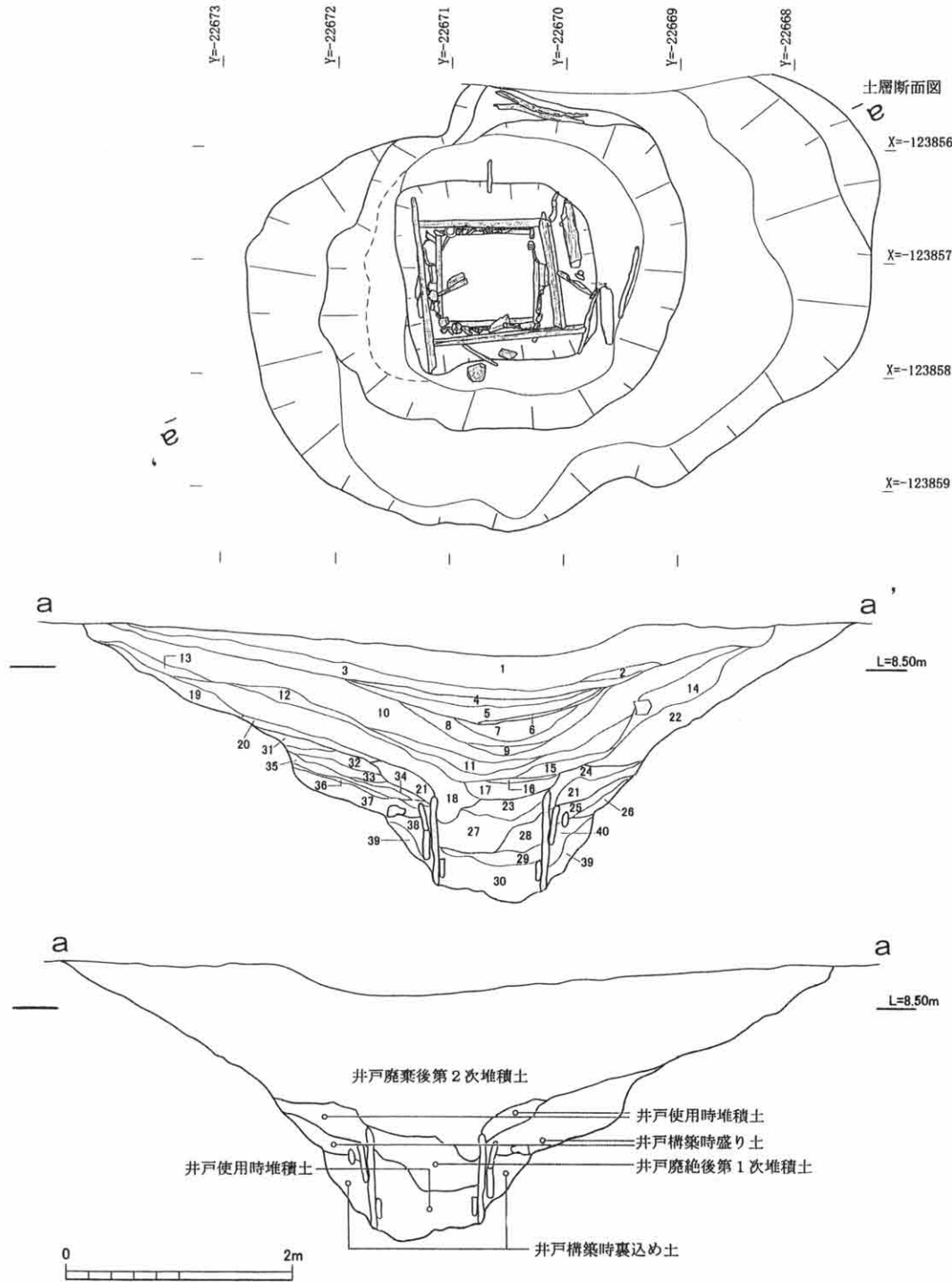
まず、市田齊当坊遺跡の井戸 S EC453の事実関係について見ておきたい。

井戸 S EC453はC調査区の南部で検出した井戸で、大溝 S DC401によって掘形北半の上半部が破壊されているだけで、井戸側は完存していた。5.4×4.1mの長楕円形の掘形を有し、深さは2.4mを測る。掘形の断面形状は段を有したすり鉢状を呈している。二段目の掘形は一辺1.7mの方形で、四辺の壁面には比較的大きな横長の板材を立てており、その内部には縦板を立て並べて、井戸側が構築されていた。井戸側は一辺0.8mで、縦板はその内側を横棧で支えられていた。井戸側は高さ70~80cmしかなく、調査時にも水が湧いており、水の湧き出し口を保護する程度でしか作られていない印象を得た。

土層の観察により、井戸側を構築した後に掘形の東側を盛り土してテラスを作りだし、その位置で水を汲んでいたものと判断した。そして、埋土の土質やラミナ構造の有無により、それぞれの層位について、井戸構築時・使用時・廃棄時の堆積時期を推定した。最終的に井戸 S EC453は一気に

埋め戻されたようで、掘形内出土の土器は市田3期でまとまっている(pp. 59-61)。

問題となる寄生虫卵を検出した土層は、井戸廃絶後第1次堆積土である27層である。この土層の試料1cc中には、鞭虫卵1,091個、回虫卵397個、総計で1,488個もの寄生虫卵が含まれていた(pp. 273-275)。この密度はまさに糞便そのものの密度であり、ほかの遺構埋土中では寄生虫卵を



第2図 井戸S EC453実測図(『市田斉当坊遺跡報告書』より転載・加筆)
 井戸構築時裏込め土(38-40層) 井戸構築時盛り土(25・26・31-37層)
 井戸使用時堆積土(28-30層) 井戸使用時堆積土(21・24層)
 井戸廃絶後第1次堆積層(23・27層) 井戸廃絶後第2次堆積層(1-20・22層)

全く確認していないことと較べて、際だった特色をなしている^(注3)。さらに、この土層からはイネ類が多量に出土し、ほかに、キビ、ヒエ、アワなどの大型植物化石が出土している(pp. 263-267)。花粉の比率を見ると、イネ科花粉が総検出花粉の70%を占め、「本遺構は井戸あるいはトイレ?と考えられ、堆積盆として閉鎖的である。こうした環境下において高い優占率を示すイネ科花粉は大量のイネ部位の検出と考え合わせ、稲藁や稲籾などが廃棄された結果を示している」と報告されている(p. 271)。しかも、これより上位の埋め戻し土中にも、比較的多くのイネ花粉が含まれているので、井戸を埋めていく間を通じて、糞便やイネ藁やイネ籾、キビ、ヒエ、アワなどを廃棄していたことは間違いなからう。

ところで、トイレ遺構分析以外にも花粉分析も実施した。花粉分析では、井戸の使用時の堆積土と判断する29層中にもイネ花粉およびわずかな寄生虫卵が検出されている^(注4)。ほかの層序よりの汚染とも考えられるので、寄生虫卵を検出した事実を過大評価できないが、イネ花粉の占める割合が高い点は注目に値する。井戸使用時にも、井戸内にイネが投げ込まれていたと言えるのではなからうか。

市田齊当坊遺跡ではもう一基の弥生時代中期の井戸を検出している。D調査区で検出した井戸S ED31である。井戸S ED31も井戸S EC453と同じく降下取水式の井戸である。この井戸内の堆積土はトイレ遺構分析を実施していないが、花粉分析により、イネ科・イネ属型の花粉が埋土中に多く認められた。しかも僅かではあるが、花粉分析中に、井戸枠内中央畦下層で寄生虫卵が、井戸S EC453井戸枠内最下層(27層)と同程度にカウントされている点は注目に値する(p. 256、付表1)。井戸S ED31内の個々の堆積土は、その堆積時期を特定できなかったが、少なくとも井戸S EC453と同様、糞便やイネが井戸使用時もしくは廃棄時に投げ込まれたことが窺える。

井戸S EC108は古墳時代初頭の井戸である。この井戸ではトイレ遺構分析を実施し、寄生虫卵は確認できなかったが、花粉化石を同定できた。分析したのは、井戸側底の最下層の土砂中であり^(注5)、ここではアブラナ科の花粉が特に多く確認できた。井戸S EC108は、「本遺構も井戸と考えられ、堆積盆としては閉鎖的である。また、アブラナ科は虫媒花であり、散布能力は小さく、花粉生産量も少ない。こうした状況もとS EC108遺構ではアブラナ科花粉が多く検出されており、アブラナ科植物が捨てられたことを示している可能性が考えられよう。ちなみにアブラナ科の栽培種としては縄文時代の遺跡からも見つかったカブ、弥生時代に中国から伝わったダイコンなどが考えられよう」(pp. 271-272)と報告されている。この井戸S EC108では寄生虫卵を確認できていないが、井戸使用時にアブラナ科植物が井戸内に投げ込まれたことが花粉分析より确实視される。

以上のように、弥生時代の2基の井戸S EC453・S ED31はともに埋土中に、寄生虫卵やイネなどの花粉・植物遺体が多く含まれていた。少なくとも廃棄時には、そういったものを井戸内に投げ込んでいたようである。そして、井戸S EC453や井戸S EC108の使用時の埋土中より、イネやアブラナ科の花粉が多く出土していることを重視すると、井戸内にモノを投げ入れることは、

井戸使用時にも行われていたと考えられる。井戸の使用時から糞尿やイネ、五穀などを投げ込んでいたがゆえに、井戸廃棄時の段階にも糞尿やイネを投げ込んだとも考えられるのである。

現代の常識では考えにくいかも知れないが、筆者は糞尿やイネ・五穀などを井戸の中に投げ込んで、農耕祭祀が行われたと考えるものである。上述の理化学分析結果が直接的な根拠としてあげられる以外に、間接的な根拠として、以下の点があげられる。

従来の井戸の研究において、井戸が一般集落においては見つからずに、拠点的な集落で見つかることから、いわゆる普通の井戸——生活水を汲み取る井戸であったと考えにくい状況が指摘されている。川上洋一は、大和地域の弥生時代の井戸資料を199例集成し、「ここにリストアップされた遺跡は、小規模な集落での事例もあるが、その大部分は拠点集落である」（川上1999、p.28）と述べており、多くの資料を集成した上で、拠点集落に井戸が偏在していることを指摘している。こういった条件をクリアーするために、井戸は、拠点的な集落で執り行われた手工業生産のための用水を確保したものと解釈されている（堀1999）。このような指摘を裏返して言うと、井戸は通常の集落活動——生活水を確保するためには、必ずしも必要ではなかったと言えよう。単に飲用水を汲み出すためだけに井戸が作られていたのではないのである。

次いで、高野が言うように玉作り用の水を確保するための井戸という解釈はどうであろうか。まず、玉作りを行うために、井戸を掘削して確保しなければならないほどの大量の水が必要であったとは思えない。よしんば、大量の水が必要であったとしても、玉作りを行っていた中心地に井戸が位置していない点が納得できない点である。市田齊当坊弥生集落の玉作り関連遺物の分布を見ると、特定の竪穴式住居跡や、集落の特定の地区に集中するものではない。集住区であるB調査区やC調査区北半の竪穴式住居跡の大多数から、玉砥石や石鋸・玉素材・石針といった遺物が多く出土し、すべての竪穴式住居跡が玉生産に関わっていたと言っても過言ではない状況である。そのため、手工業生産用の水の確保が主であるのならば、B調査区にこそそういった井戸が必要であるはずである。しかし、現時点では井戸は見つかっていない。さらに、玉砥石や石鋸・玉素材・石針が床面に散らばっているような竪穴式住居跡S HC451やS HD23などは、ともに集落成立直後である市田2～3期のものであり、井戸の周辺に立地していることは間違いない。ところが、これらは居住域の南限近くに位置しており、決して集落の中央ではない。また、A調査区で玉作り遺物が多量に出土した、竪穴式住居跡S HA98・90も井戸と同時期のものであるが、井戸とは170～230m程度離れている。

廃棄時における井戸の取り扱い方も納得できないものである。『古事記』によると、井戸の神は^{おほなむぢ}大穴牟遲神と^{やがみひめ}八神比賣との間に生まれた神で、「^{きのまた}木俣神と云ひ、^{みる}亦の名を御井神」で、井戸には神が宿っていると認識されていた。現代にあっても、井戸を廃棄する時点では、竹筒を井戸に刺したりして、井戸神・魂を抜く儀礼が執り行われているほどである。^(注6)生活水や手工業用水を採取した井戸であったとしても、廃棄する際に、無造作にゴミ坑やトイレへと転用するであろうか。「清なる空間」を「汚の空間」へと転化するには、何らかの儀礼が執り行われないのであるか。清なる空間に汚物・廃棄物を遺棄するというような、それぞれのカテゴリーの境界を曖昧にする

ような行為を行っても気にしないほど、人間の思考・感情は合理的なのであろうか。しかし、井戸使用時にも糞尿が井戸に投げ入れられていたとするならば、廃棄時の埋戻し土の中に投げ入れることも、引き続き同じ扱いをしていたという点で納得できるのである。筆者には、井戸 SEC453に埋められたすべてのものが、少なくとも井戸の廃棄儀礼に伴うものと思えるのである。

そして、最後に、古代においては、井戸は神聖視されて儀礼の場として利用され、加えて、糞尿はある意味では豊穡を意味していたのである。この点について、以下、見ていきたい。

3. 史料の中の井戸

『古事記』や『日本書紀』、『風土記』といった史料には、多くの井戸が記載されている。山本博は『井戸の研究』の中で、史料に記載された井戸を大きく実用の井戸と祀られた井戸の二種に分けている。井戸の使用目的は厳密に一つだけという場合はなく、多様な目的に用いられていることを認めつつも、実用の井戸を、飲用水、灌漑用水、流泉のほとりの歓楽、市場の四つの使用目的に分類している。ここでは、氏の論を紹介しつつ、古代において、井戸がどのように用いられて、どのように観念されていたのかを、概観したい。

1) 実用の井戸

①飲用水 井戸を掘る大きな目的の一つは、飲用のための水を得ることに異論はなからう。古代においては、庶民のための井戸と尊貴のための井戸が峻別されていたようである。後者の井戸は「御井」と呼ばれており、「御」を冠して庶民の井戸と異なることを示している。『播磨国風土記』には、^{かしはで}麩の御井・^み松原の御井・^{ささ}佐々の御井が見られ、これらの井戸は、皇居・行宮・行幸に関連して定められている。『常陸国風土記』では、茨城郡桑原の丘で^{やまとたける}倭武天皇(日本武尊)に食事を奉る時に^{もひとりべ}水部に命じてあらたに井戸を掘らせている。民衆の井戸と峻別しているようだ。雄略天皇即位前紀では、^{みまのみこ}御馬皇子が^{みわのきみむさ}三輪君身狭を三輪の磐井の側で刑する時、「井を指して^{とご}詛ひて曰く、『此の水は、百姓のみ唯飲むことを得む。王者は、獨飲むこと能じ』といふ」と述べ、民衆だけが用いる井戸であるように詛い事を述べている。

これら尊貴のための井戸は、庶民の飲用には供されなかったと考えられる。

②灌漑用水 灌漑用の井戸もある。『常陸国風土記』の新治郡「新治の井」は、国造の祖先である^{ひならすのみこと}比奈良珠命が下向して最初に掘った井戸で、「井を^は治りひらいた」——豊富な水量で水田を潤すことができたので、郡の名としたとある。また、行方郡の「椎の井」は湧き出る清水を池とし、その水を荒地にひいて耕地化している。

このように、井水・湧出水は耕作にも用いられていた。

③流泉のほとりの歓楽 井戸や流泉のほとりで歓楽を催した記述がある。『常陸国風土記』では筑波郡筑波岳の流泉、行方郡国社の大井、久慈郡密筑の里の大井、『出雲国風土記』の^{おほみのしみづ}邑美の冷水などがある。老若男女が井戸や流泉のほとりに集まって、歌舞・飲食を楽しんでいる。山本は、これらは歓楽だけを目的としたものではなく、豊かな稔りをもたらす、水への感謝を兼ねた行事であっただろうと論じている。

④井戸と市場 井戸の在るところには人が集まり、交通の便が良いところでは市が開かれ、集落が発達する。『万葉集』の「海柘榴市^{つばいぢ}」や『出雲国風土記』の「大井」のある浜辺を例に掲げている。

2) 祀られた井戸・清水

水が湧き出るところは、水の清澄さ、水の有用性、そして水自体を地中から湧き出させるという神秘的な力のゆえに、古代の人々にとっては、祀るための対象であった。それは、こんこんと湧き出る水に神秘的な力や生命力を見だし、そういった力は他界からもたらされたものと観念されていたからであろう。

祀られた井戸・清水の記載があるのは『出雲国風土記』だけで、他の『風土記』にはその記載がない。しかし、『延喜式』には出雲国以外の国々の井戸・清水を祀る神社の記載があるので、他の国々においても多くの井戸・清水が祀られていたことは明らかである。『出雲国風土記』には、祀られた井戸・清水が13社記載されている。一方、『延喜式』に記載されている祀られた井戸・清水の分布は全国に及び、46社を数える。これらのうち、8社が出雲国である。出雲国では13社のうち8社しか延喜式に記載されていないこと^(注7)から、各地の祀られた井戸・清水がすべて『延喜式』に記載されているのではなく、より多くの井戸・清水が全国的に祀られていたとする。

山本博は、古代においてはかのように多くの井戸・湧泉が祀られていたが、神道の場合、注連縄を張り、一般の水の使用を禁じて神事にのみ水を用いたため、現代においては本来の井戸・湧泉に対する崇敬祭祀が忘れられるようになったと述べている。

4. 井戸の儀礼と神話と糞尿

1) 儀礼の場としての井戸

井戸は儀礼が執り行われる場所であった。

『古事記』では、須佐之男命が高天原に上って行こうとしたとき、天照大神は須佐之男命に邪心があるのを恐れ、天の真名井を前にして「誓い^{うけい}」を行っている。天照大神は須佐之男命の剣を、須佐之男命は天照大神の玉を「天の真名井に振り滌ぎて、さ噛みに噛みて」、吐き出した際に生まれた神が男神であるか女神であるかで、邪心の有無を計っている。実際にこういった誓いが行われたかどうかは定かではないが、先に見たように、古代においては湧水や井戸を神聖視していることから、その前で重要な儀礼を行ったり、誓約を行ったことは頷かれよう。またこの場合の「振り滌ぎて」は、振り動かして洗い清めることであり、玉や剣の呪術性を高める行為と考えられている。このように、井戸は単に飲料水を汲み取るための場所だけではなく、重要な儀礼を行う場所として認識されていたのである。そして、井戸の中で「振り滌」いでいるように、井戸の中の水は儀礼上の「清浄さ」だけを必要としており、衛生的な観点での「清浄さ」はさほど重視されていなかったであろう。いわば、象徴的な清浄さであり、それを保証したのは、その井戸自体の由来であり、儀礼を司る司祭であったのであろう。

古代の人々は、井戸・湧水点の、尽きることなく湧き出る水に、神秘的な力や生命力を見いだ

した。そして、井戸の底には他界とこの世を繋ぐ通路が存在し、他界から神秘的な力がもたらされると観念したのであろう。有名な海幸彦と山幸彦の物語では、山幸彦は無くした釣り針を探して、海神が住まう宮殿を訪れる。宮殿の門の傍らには井戸があり、その傍らに「湯津香木」が植わっており、ここに座った山幸彦の姿が井戸の中に映る姿を女官が見つけている。このように、井戸は湯津香木とともに、異界と現世とを繋ぐ「チャンネル」として理解され、それゆえ神秘的な力が湧きだすと考えられていたのであろう。

2)水神の誕生と糞尿

井戸の神は、『古事記』では大国主神と八上比賣との間にできた神であるが、正妻の須世理毘賣に畏れをなして、「その生める子をば、木の俣に刺し挟みて返りき。故、その子を名づけて木俣神と云ひ、亦の名を御井神と謂ふ」とある。しかし、この神は、ここで井戸の考察を進める上で、さほど興味を引く内容ではない。

それに対して、井戸の神が水神に包摂されると捉え、水神の生誕に眼を向けると、興味深い記述が認められる。そこでは、水神は糞尿と密接な繋りがあり、生産を司る神とも関連が深いと捉えられているのである。

『古事記』を基にその内容を見ると、伊邪那美命と伊邪那美命の国生み神話の中で、伊邪那美命が次々と神々を生み出していくと、火之迦具土神を生んだ際に、「みほと灸かえて病み臥せり」と、瀕死の状態に至ってしまう。伊邪那美命は、その後、瀕死の床に臥せっている間に幾人かの神々を生んで死んでしまうが、この時に伊邪那美命の身体の各所から出た排泄物が、鉾物の神や埴の神とともに水神や生産力の神となっている。その件を引用すると、「たぐりに生れる神の名は、金山毘古神、次に金山毘賣神。次に尿に成れる神の名は、波邇夜須毘古神、次に波邇夜須毘賣神。次に尿に成れる神の名は、彌都波能賣神、次に和久産巢日神。この神の子は、豊宇氣毘賣神と謂ふ」とある。「たぐり」は吐瀉物で、金山毘古神・金山毘賣神となり、尿は波邇夜須毘古神・波邇夜須毘賣神となり、尿は彌都波能賣神・和久産巢日神となっている。金山毘古神・金山毘賣神は鉾物の男神・女神、波邇夜須毘古神・波邇夜須毘賣神は、土器の材料の粘土である「埴」を神格化した男女の神、彌都波能賣神は水の女神、和久産巢日神は生産の精霊神で生産力を象徴し、豊宇氣毘賣神は食物を司る神とされている。手工業の神をはじめとし、水の神や生産力の神、そして食物の神が、排泄物から生まれたという点は重要である。

『日本書紀』では第二・第三・第四の一書に同様の話が載っている。第二の一書では、まず水神、土神が生まれ、火神と土神とが結びついた結果として生産の神稚産霊が生まれて、彼の頭の上に「蠶と桑と生れり。臍の中に、五穀生れり」とあり、『古事記』よりも具体的に、排泄物からなった神が五穀などを生み出したことになっている。

このように糞尿をはじめとする身体からの排泄物は、豊穰や水神、五穀を意味する側面が認められる。このように理解すると、『古事記』には、須佐之男命が高天原で乱暴狼藉を働き、天照大御神が大嘗祭を行う祭殿に糞を撒き散らしている記述があるが、単に乱暴狼藉という側面だけではなく、日本神話における須佐之男命のトリックスターとしての役割を考えたとき、糞尿に豊

穰の意味があったがゆえに、あえてそれを大嘗祭の席に持ち出したとも考えられるのである。とは言っても、『日本書紀』の同様の記事中には、天照大神は「不平^{やぐさ}みたまふ」と怒っているのですが、たぐり・屎・尿といった身体からの排泄物は、現代人と同じく、一般的には汚物と判断されていたことは間違いない。

3) 豊穰のシンボルとしての糞尿と井戸祭祀

上述のように、たぐり・屎・尿から鉦山の神や埴の神、水の神が誕生し、それらとともに生産を司る神が出現しており、排泄物は豊穰を意味する側面を有していた。この記述以外にも、糞尿をはじめとする排泄物が、農耕作物と結びついている記述がある。

『古事記』では、須佐之男命が高天原から追放された後、大氣津比賣神に食料を乞うて、饗応を受ける記述がある。そこで、「ここに大氣津比賣^{おおげつひめ}、鼻口また尻より、種種の味物を取り出して、種種作り具へて進る時に、速須佐之男命、その態を立ち伺ひて、穢汚して奉進とおもひて、すなわちその大宜津比賣神を殺しき。故、殺さえし神の身に生れる物は、頭に蠶生り、二つの目に稲種生り、二つの耳に粟生り、鼻に小豆生り、陰に麦生り、尻に大豆生りき。故ここに神産巢日の御祖命^{みおやの}、これを取らしめて、種と成しき」とある。大宜津比賣神は食物を掌どる神で、鼻や口や尻から排泄物を出し、須佐之男命を供そうとした。大宜津比賣神は自らの排泄物を食料に変えているのだが、須佐之男命はその現場を目撃し、汚いものを食べさそうとしていると怒り、大宜津比賣神を殺害する。そして、殺害した身体から、さまざまな作物の種が生まれ出たというものである。^(注10) 同様の内容は、『日本書紀』では天照大神が葦原中国に月夜見尊を使わして保食神^{うけもちのかみ}を訪ねさせた際に、保食神が口からさまざまなものを取り出して、月夜見尊を接待している。先に見たように、埴山姫＝屎と火神軻遇突智とが結びついて稚産霊が生まれ、この神から蚕・桑・五穀が生まれ出たことと一脈通じる場所である。このように、糞尿をはじめとする排泄物は、「汚いもの」という側面と、「豊穰」を意味する側面とを兼ね備えていたのである。

事物は多義的な存在である。汚物も汚い存在であるだけでなく、時と場合によっては、清浄なモノとなる。例えば、恋人とのくちづけや赤ちゃんの排泄物は、特定個人にとっては清浄なモノと認識されるであろう。しかし端的に言ってみれば、前者は単なる唾液であり、後者は糞尿でしかない。糞尿の聖(＝豊穰)と汚という両義的な意味を記号論的に捉えると、聖に対しては汚であり、聖と汚は一次元の直線では対立する両端にあり、決して混ざり合うことはない。しかし、聖の中の聖と汚の中の汚は直線的思考の両極端にあり、ともに日常からあまりにもかけ離れ過ぎているため、極めて危険な存在と観念されており、通常の間人では容易に取り扱えない状態と認識されるようになる。ここにおいて、聖・汚はともに日常からかけ離れすぎた、危険な存在として一くりにされ、その結果、二次元の軸がねじ曲げられ、聖＝汚と観念されるようになるのである。糞尿は聖でもあり、汚でもある存在なのである。

市田齊当坊遺跡の井戸内埋土から検出した花粉をはじめとする植物化石を基にすると、井戸における豊穰祭祀は、イネをはじめとする五穀や野菜(アブラナ科; ダイコン、カブ)を井戸内に投げ込んでいたと復原できる。人々は、井戸の中から湧き出る神秘的な力に仮託して、それらを投

げ入れることで、五穀や作物の豊穡を祈念したのであろう。そしてその際に、豊穡を象徴する「糞尿」も投げ込まれ、彼らの祈りが確実に叶うことを期したと考えられるのである。

さて、井戸が農耕祭祀を行う場であったとして、周辺の弥生集落では必ずしも井戸が作られていないのはなぜだろうか。おそらく、そういった儀礼は、市田斉当坊集落の周辺に位置する集落と共同で執り行われた地域的な祭祀であったために、限られた拠点的な集落でしか、井戸が見つからないのであろう。見方を変えると、その儀礼を執り行うことができるだけの、力を有した司祭が当市田斉当坊集落にしか住まわっていなかったと考えられる。このように類推すると、市田斉当坊弥生集落は、井戸で執り行われた豊穡儀礼を介して、周辺集落と緊密な紐帯で結ばれていたと言えるのではなかろうか。大阪府池上曾根遺跡で検出された井戸は、神殿と判断される大形建物と有機的な関連を有して配置されており、祭祀用の特別な井戸と推測され、広域の地域祭祀やそれに準ずる集団祭祀が執り行われたと想定されている(乾1996)。市田斉当坊遺跡の井戸は、池上曾根遺跡の井戸と通底するものであろう。

5. おわりに

以上、市田斉当坊弥生集落の井戸 S EC453 から寄生虫卵が多く検出された事実を手掛かりに、記紀の史料を引きながら、井戸が神聖視されていたこと、そして糞尿が豊穡と生産の神々と密接な結びつきがあることを指摘し、井戸 S EC453 などは糞尿を用いて豊穡を祈念する儀礼が執り行われた井戸であると推測した。

報告書の理化学分析では、トイレ遺構としての可能性も指摘されているが、上述のように、筆者は基本的には井戸と考えるものである。糞尿を投げ入れた点については、注3で縷々述べているように、やや曖昧な点もある。しかし、イネ花粉が井戸の埋土から多く検出されている点は、トイレ遺構分析(付論8)と花粉分析(付論6)で共通して認められ、少なくとも、そういった植物体を井戸の中に投げ込んで、「生活用水を汲むこと」以外の行為を行っていたことは間違いないであろう。

弥生時代における井戸掘削の契機としては、手工業用水の確保や環濠集落の成立による集住のために、飲料水を確保する必要が増大したとの見解があるが、2節で述べた理由により、それぞれがそれなりに納得しがたい点を有する仮説であると考えられる。ここで提示した「豊穡儀礼用の井戸」という見解は、少なくとも市田斉当坊遺跡の井戸に関してのみ、そういった仮説と同程度の根拠を示すことができたと考えられる。

問題を一つ。井戸の豊穡祭祀を執り行った司祭は男性、女性のどちらであろうか。

筆者が用意した答えは、男性である。理由は、例えば、山の神は女神で、女性がトンネルに入ると嫉妬し、工事の安全を妨げると考えられている。また、日本各地の伝承では、山の神は女神であるがゆえに男性器に異常な興味を持っていると考えられている(吉田1992)。ゆえに、水の神である彌都波能賣神みつはのめのは女神であるので、女性を嫌い、男の司祭を好むと考えられるのである。

漫画『犬夜叉』では、主人公のかごめは井戸を通して現代と過去を行き来し、『リング』の貞子は、井戸の中から這い出して現代人を狂気へとおとしめる。小野篁は六道珍皇寺の井戸を通して毎晩閻魔庁へと出かけ、お菊は夜な夜な井戸から出て、足りないお皿の枚数を数える。お城の井戸の中には、城外へと抜ける秘密の抜け穴が掘られていると、まことしやかに語られる。

現代においても、井戸は神秘的な存在として、心の奥底の琴線に触れるものなのであろう。

(いわまつ・たもつ=当センター調査第2課調査第3係主任調査員)

- 注1 寄生虫卵が大量に検出したという事実の解釈としては、埋め戻し土に糞便を投げ入れたというのが暗黙の解釈である。しかし、糞便やイネ初などが井戸を埋める土の中に、埋め戻す以前に混じっていたという可能性や、糞尿や植物遺体が井戸の周りから流れ込んだ可能性も想定できる。筆者は、分析者や高野と同じく、人為的に投げ込まれたものとして、以下の論を進めたい。
- 注2 トイレ遺構分析をしていただいた際に、井戸側内の27層よりも下層の試料も採取していただいたが、寄生虫卵・花粉が遺存していないため、分析不可ということで、結果報告には掲載されていない(パレオ・ラボ私信)。
- 注3 『市田斉当坊遺跡 京都府遺跡調査報告書』第36冊の付論6～9では、トイレ遺構分析(付論7～9)と花粉分析(付論6)の結果を報告しているが、同じ層位から採取した試料であっても、それぞれの花粉と寄生虫卵が出現した数が異なっている。また、前者の分析では、井戸S EC453内で寄生虫卵が多数確認された27層より下位の土層では、寄生虫卵・花粉が遺存していなかったが、後者の分析では花粉とともに数個の寄生虫卵が確認されている。この理由として、一つには、付論6の花粉分析資料を提出したのが、トイレ遺構分析を実施した数ヶ月後であったため、サンプル土壌が乾燥し、花粉・寄生虫卵の一部が破壊された可能性がある。さらに、それぞれの分析者に問い合わせたところ、大凡、次のような回答を得た。寄生虫卵の数は、前者は1ccあたりの個数であるので、後者の値の7～14倍が前者の値となるため、実数に大きな違いがでる。また、それぞれの分析で花粉・寄生虫卵の分離方法が異なること、分析者の熟練度に違いがあること、同じ層位から採取した試料であっても、採取する位置が異なると、例えば粘土の偏りがあったりするので、異なった値になる可能性があるらしい。以上の理由により、前者の分析では寄生虫卵・花粉が見つからなかった土層でも、後者の分析により数個の寄生虫卵が確認されたようである。そして、この程度の個数は汚水で洗われるだけでも付着することがあるらしい。しかも、井戸以外の溝や住居では乾燥のため寄生虫卵が破壊されるのに対して、井戸の場合は地中深くにあり、埋土が湿潤なため、寄生虫卵が残りやすいとのことである。それ以外にも、上位の寄生虫卵が下位の層に染み出した可能性も考えられるらしい。そのため、付論6でカウントされた程度の寄生虫卵が井戸側の下層及び下層近くに遺存していたからと言っても、糞便を井戸に入れていたという直接的な証拠とはならない、とのことである。
- 注4 花粉分析中におけるカウントであり、「花粉のカウント中に寄生虫卵が見られるのでカウントした」という程度であり(分析者私信)、信憑性が低いのかも知れない。
- 注5 大溝S DC25・90・401、井戸S EC453のトイレ遺構分析を主眼としたため、土壌採取時には、井戸S EC108はほぼ掘削が終了していたため、井戸側の下位の土壌しか残っていなかった。
- 注6 山本博は、「まなこ」を井戸の中に入れ、廃棄時にそれを取り出す行為について述べている。「まなこ」はいわば、井戸に魂を入れるための依代であり、「井戸を埋めるときには必ずまなこを取り上げ

なければ祟る」と考えられていた。「井戸を埋めるときには青竹を井戸の中心に立ててから埋める、これは井戸の神の通路となる」と信じられていた(山本1970 pp.87-99)。

注7 (山本1970 p.41)には、「出雲風土記十三社のうち六社が式に採録されていない」とあるが、同ページには『延喜式』記載の祀られた井戸・清水の名が8社掲げられており、この場合、5社が式に採録されていないこととなる。

注8 倉野憲司校注『古事記』p.72注7、には、「井のほとりの樹木に神が降臨するという信仰に基づいている」とある。

注9 山口昌男「天皇制の深層構造」『天皇制の文化人類学』岩波現代文庫 2000

注10 因みに、身体から出された排泄物や死体が、さまざまな食料となり作物の起源となったという神話は、記紀だけのものではなく、世界の各地に分布しており、その代表的な神話の女性の名を取って、ハイヌウェレ型神話と呼ばれている。吉田敦彦によると、こういった神話を持つ民族の中には、農作物はハイヌウェレ自身であり、農作物を食することはまさに彼女を食べることであり、豊穡儀礼として実際に女子を犯し、その肉を食することが行われたという(吉田1992 pp.140~169)。

参考文献

乾哲也「弥生ビトの祈りのかたち—池上曾根遺跡における祭祀の事例—」『考古学ジャーナル』 No. 398
ニューサイエンス社 1996

川上洋一「大和の井戸とその周辺」『みずほ』第30号 大和弥生文化の会 1999

倉野憲司校注『古事記』 岩波文庫 1963

坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注『日本古典文学大系 日本書紀』上 岩波書店 1967

高野陽子「市田斉当坊遺跡の井戸と弥生時代の木組井戸」『市田斉当坊遺跡 京都府遺跡調査報告書』第36冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 2004

野島永・高野陽子・岩松保ほか『市田斉当坊遺跡 京都府遺跡調査報告書』第36冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 2004

堀大介「井戸の成立とその背景」『古代学研究』第146号 1999

山本博『井戸の研究』 綜芸社 1970

吉田敦彦『昔話の考古学 山姥と縄文の女神』 中公新書 1992

古代日本海沿岸地域における土器様相の比較検討(上)

筒井 崇史・村田 和弘・松尾 史子

1. はじめに

筆者らは、京都府北部(以下、丹後地域^(注1))において、飛鳥時代から平安時代にかけての古代の遺跡について調査する機会を得た。その調査成果については報告書や概報などで報告してきたところである。しかし、土器様相や土器編年に関していえば、良好な一括資料や層位資料、あるいは暦年代を推定しうるような紀年銘資料の欠如などもあって、十分な検討を行うには至っていない^(注2)。そこで、丹後地域の土器様相について、日本海沿岸地域の土器様相と比較、検討を通じて、その特色と変遷を明らかにする作業を、平成14・15年度に当調査研究センターの共同研究として実施した。

本稿は、この共同研究「古代日本海沿岸地域における土器様相の比較検討」の成果をまとめたものである。共同研究は、筒井を主担当とし、村田・松尾を共同研究員として実施したが、平成15年度に松尾が京都府教育委員会へ異動したため、その後は筒井・村田の2名で行った。本稿作成に当たっては、改めて松尾にも執筆を依頼した。本稿は、各項ごとに執筆を分担したが、その内容については3名による討議を経たものである。なお、共同研究としては、飛鳥時代から平安時代を対象として実施したが、本稿では、主に奈良時代後半から平安時代を対象とする。

2. 日本海沿岸地域における土器様相について

本章では、丹後地域をはじめとする北近畿地方と、それに近接する山陰・北陸両地方の資料について、当該期の土器様相について概観する。この作業を通じて各地の主要な土器の器種構成の変化や消長、あるいは暦年代推定資料などについて確認したい。

a. 山陰地方(因幡・伯耆)

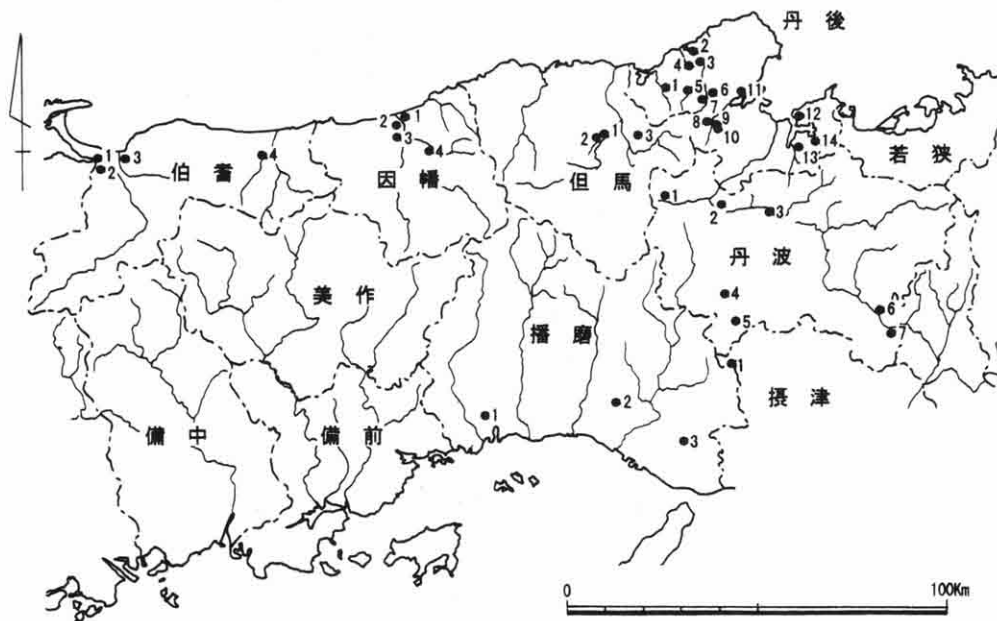
ここでは山陰地方のうち、旧国名でいうところの因幡・伯耆の2地域を取り上げる。両地域では、国府跡(国庁跡)・国分寺跡などをはじめ、当該期の遺跡の調査が数多く行われており、良好な土器資料が出土している。

①因幡地域(鳥取県東部)

国府町因幡国府跡は、1970年代には場整備に伴う範囲確認調査でその概要が明らかにされている^(注3)。調査の結果、掘立柱建物跡・区画溝・井戸などが確認されている。出土遺物として須恵器・土師器・黒色土器・施釉陶器・木簡などがあるが、良好な一括資料あるいは層位資料がなく、

遺構や遺物の変遷については不明な点も多い。須恵器は碗形態のものは少なく、底部の切り離しに糸切りを利用した杯Bがある。土師器には内外面に回転ナデ調整の痕跡を明瞭に残し、底部糸切りの杯や、高めの高台を持つ碗が多くある。黒色土器は高台を有し、内面のみ黒色処理を施す小型碗があるものの、出土量は少ない。施釉陶器は破片資料が大半で、量的には緑釉陶器が多いようである。出土土器の特徴から、平安時代前・中期に遺跡の盛期があったと考えられる。なお、国府が機能していた時期を具体的に示すものとして、「仁和二年」(886年)銘の木簡が出土している。ただし、土器資料とは共伴しない。

一括性に乏しい因幡国府跡出土土器に対して、鳥取市山ヶ鼻遺跡^(注6)・岩吉遺跡^(注7)、郡家町山田10・12号窯^(注8)などでは比較的良好な資料が出土している。山ヶ鼻遺跡では縄文時代から中世に至るまでの遺構・遺物が検出されているが、特に土坑S K 14からは平安時代中期から中世前期にかけての土器資料が層位的に出土しており、土器様相の変遷を考える上で重要な遺構である。S K 14出土



第1図 山陰・北近畿地方主要遺跡分布図

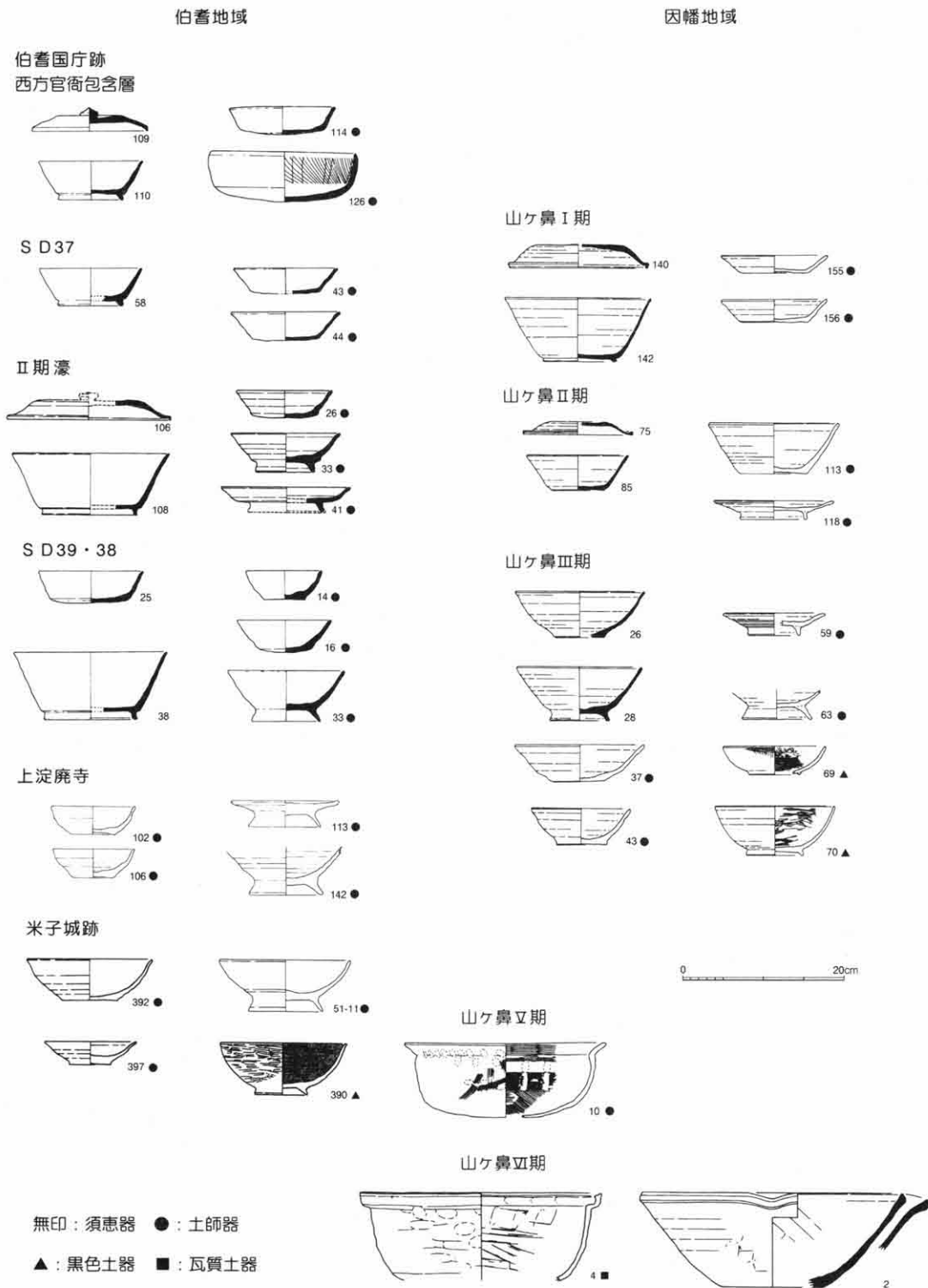
伯耆	丹波	丹後
1 米子城跡	1 高内鎌谷遺跡	1 女布北遺跡
2 古市宮の谷山遺跡	2 上楽遺跡	2 横枕遺跡
3 上淀廃寺跡	3 青野・綾中遺跡群	3 縁城寺旧境内隣接地遺跡
4 伯耆国庁跡	4 大山荘金井畑遺跡	4 浅後谷南遺跡
	5 初田館跡	5 名地谷遺跡・窯跡
因幡	6 池上遺跡	6 左坂横穴群
1 秋里遺跡	7 篠窯跡群	7 薬師遺跡
2 岩吉遺跡		8 下畑遺跡
3 山ヶ鼻遺跡	播磨	9 桜内遺跡
4 因幡国府跡	1 相生窯跡群	10 中上司遺跡
	2 札馬窯跡群	11 中野遺跡
但馬	3 神出窯跡群	12 浦入遺跡群
1 深田遺跡		13 倉谷遺跡
2 衾布ヶ森遺跡・但馬国分寺跡	摂津	14 行永遺跡
3 袴狭遺跡	1 相野窯跡群	

土器は出土層位から大きく6期に区分されている。最古段階のⅠ期は須恵器蓋・杯B・杯A、土師器杯などが出土している。このうち、須恵器杯Bは斜め外上方に直線的にのびる口縁部と小さな高台を貼り付ける。底部の切り離しには糸切りが用いられているが、土師器杯には使用されていない。続くⅡ期では、新たに須恵器では底部糸切りの皿、土師器では施釉陶器を模倣した皿B、須恵器の器形に類似した杯などが加わる。須恵器杯Aは口径に対して器高が高い逆台形状の器形を呈するものが主体となる。このような杯Aは郡家町山田12号窯出土須恵器などに類例がある。Ⅲ期は須恵器椀や椀状の杯Bなどがあるが、出土量は前段階に比べ減少する。須恵器椀は、因幡地域ではあまり類例のない形態のもので、報告では勝間田系とされるが、平安時代中期頃の播磨地域あたりの須恵器窯の影響を受けた製品の可能性も否定できない。土師器は有高台杯・皿のほか、底部糸切りの無高台杯がある。これは前段階の須恵器類似品とは若干異なった器形を呈する。底部糸切りの無高台杯は丹後地域京丹後市縁城寺旧境内隣接地遺跡^(注9)や丹波地域福知山市上楽遺跡^(注10)出土土器に類例がある。このほか黒色土器椀があり、第2図69は畿内系黒色土器椀の模倣品と考えられる。第2図70も畿内系の模倣品であるが、回転台を使用して成形し、高台を貼り付ける。Ⅳ期の出土遺物は少ないが、前段階に引き続き底部糸切りの無高台杯がある。ただし分量が前段階に比べると若干縮小しており、後述の淀江町上淀廃寺焼土層出土土器^(注11)に類似する。Ⅴ期は土器様相の全容を確認することはできないが、土師器鍋が出土している。類似したものが鳥取市秋里遺跡^(注12)の掘立柱建物跡の柱穴から黒色土器椀や白磁皿とともに出土している。さらに同形態のものは丹後地域においても多く出土している。最終段階のⅥ期には、瓦質土器鍋やいわゆる東播系須恵器鉢などが出土しているが、供膳具は土師器小皿のみで、詳細は不明である。

以上、山ヶ鼻遺跡SK14出土土器について、当該地域における数少ない層位資料であることからやや詳しくみてきた。これらの年代観について報告書では、Ⅰ期=9世紀末~10世紀前葉、Ⅱ期=10世紀前半~11世紀初め、Ⅲ期=11世紀前半~12世紀初め、Ⅳ期=12世紀前半~中頃、Ⅴ期=12世紀後半ないし末、Ⅵ期=13世紀とされている。これに対して筒井の私見を以下に提示したい。SK14ではⅠ期に伴う木片について放射性炭素年代測定の結果、暦年代交点として西暦895年の年代が得られているという。また、Ⅰ~Ⅳ期までは土器の器形変化や器種構成の変化が継起的に見られるので、比較的連続した時間の中で理解できる。さらにⅣ期については上淀廃寺焼土層の年代観が参考になる。以上のことからⅠ期を9世紀末ないし10世紀初頭、Ⅱ期を10世紀前半、Ⅲ期を10世紀後半、Ⅳ期を10世紀末ないし11世紀初頭と考えたい。一方、Ⅴ期は秋里遺跡出土の白磁皿の年代観から12世紀代、Ⅵ期は東播系須恵器鉢の年代観から12世紀後半から13世紀代と考えられる。Ⅳ期とⅤ期の間に若干の時間差があるが、遺構埋土の堆積状況もここを境に変化していることから、この年代観は妥当と考える。

岩吉遺跡では掘立柱建物跡や土坑、溝などが検出され、須恵器・土師器・黒色土器・施釉陶器・木簡などが出土している。溝SD-X・SD-Z・SD05出土遺物は奈良時代・平安時代前期のものを少量含むものの、大部分は山ヶ鼻遺跡SK14のⅠ~Ⅲ期のものである。また、落ち込みSX01出土土器は山ヶ鼻遺跡SK14のⅠ・Ⅱ期が主体である。このSX01にはこれらよりも様

相的に古いと思われる土器の一群があるが、これは同じS X01出土の「天長二年」(825年)銘木簡に伴う土器群である可能性が高い。したがって、両者の比較によって、当遺跡における9世紀代の土器様相の抽出が可能と考える。なお、各遺構出土土器は先の山ヶ鼻遺跡S K14出土土器の編年観では、2時期以上にわたるものが多いことから、一括性には乏しい。



第2図 山陰地方主要土器実測図
(番号は報告番号、土器の配列はおおよその時間的な推移および併行関係を表す)

②伯耆地域(鳥取県西部)

倉吉市伯耆国庁跡では1970年代を中心に範囲確認などの調査が実施された^(注13)。調査の結果、礎石建物跡・掘立柱建物跡・門跡・溝・土坑などが確認されている。国庁域の中央部には内郭と外郭が存在し、内郭の内部には正殿をはじめとする主要殿舎が存在する。これらは建物の建て替えや出土遺物から4時期の変遷が考えられている。伯耆国庁跡出土土器については、すでに詳細な検討が行われているが、ここでは巽淳一郎氏の成果を参考にしながら、出土土器を概観する^(注14)。なお、伯耆国庁跡出土土器は、溝や土坑などから出土した一括性のある資料が多い。各遺構出土の土師器杯・椀の大部分は赤彩するが、時期が下るにしたがって赤彩するものは少なくなる。

さて、巽氏は出土土器を第1～第3様式に分け、第1様式は包含層出土土器を主体として設定された。第1様式には須恵器杯A・杯B、杯B蓋、土師器杯などがある。但馬国分寺跡S D01出土土器との比較、および紀年銘木簡^(注15)の存在から8世紀後半代の年代観を与えられている。続く第2様式はS D37型式→S D35型式^(注16)→S K05型式の各段階の変遷を考えておられる。このうち、出土土器の特徴から、S K05型式に9世紀後半代の年代観を与えられている。なお、S K05型式に含まれる溝S D35出土土器中に、口径が大きく外方に開き、底径がやや小さい逆台形状を呈する杯があるが、同形態のものを丹後地域京丹后市横枕遺跡^(注17)などで確認することができる。第3様式は溝S D38・39出土土器を標式として設定されている。この段階には底部糸切りの無高台杯が新たに見られるようになり、底部ヘラ切り未調整の杯類と共伴する。前段階にみられた有高台杯なども引き続き見られるが、つくりがずいぶん粗雑化する。第3様式出土土器群は、伯耆国分寺焼失後に建てられた建物跡の基壇下で検出された土壇出土土器群に類似する^(注18)。伯耆国分寺の焼失は天曆2年(948年)と伝えられており、第3様式は10世紀前半代の年代観を与えられている。なお、国庁としての機能は10世紀頃に停止すると考えられる。

国庁跡以外の遺跡としては上淀廃寺や米子城下層などがある。淀江町上淀廃寺は飛鳥時代後半に創建され、平安時代中期に焼失、廃絶したと考えられる寺院である。この焼失時の火災に伴う焼土層が金堂や塔周辺で確認されており、この層から土師器杯を中心として多量の土器が出土している。土師器杯は灯火用と考えられるが、土師器杯の大半は底部糸切りの無高台杯である。この土器群中には底部ヘラ切り未調整の無高台杯がみられないことから、伯耆国庁第3様式土器群よりも後出すると考えられ、10世紀後半から11世紀初頭の年代観^(注19)を与えられている。

米子市米子城下層では、平安時代中・後期の土器群が出土した土坑を複数検出している^(注20)。これらからは底部糸切りの土師器無高台杯や、高台のやや高めの土師器椀、貼り付け輪高台の黒色土器椀などが出土している。これらの土器群は、上淀廃寺焼土層出土土器群と同様の特徴を有しつつも、新たに黒色土器椀などが加わっている点で注意される。黒色土器椀の特徴は、因幡地域山ヶ鼻遺跡S K14出土の黒色土器椀(第2図70)に類似すると考えられる。これらは山ヶ鼻遺跡と上淀廃寺出土土器の年代観から11世紀代と考えられる。

また、米子市古市宮ノ谷山遺跡^(注21)などでもまとまった平安時代の土器資料が出土している。

(筒井崇史)

b. 北近畿地方(但馬・丹後・丹波)

ここでは旧国の但馬・丹後・丹波の3地域を取り扱う。いずれの地域においても当該期の資料は少なく、一括資料に乏しい。

①但馬地域(兵庫県北部)

この地域の資料は、一括資料として良好とはいえないが、共伴する紀年銘木簡から、暦年代が与えられており、周辺地域の資料の年代を考える上で重要である。

まず、古い資料として日高町但馬国分寺跡S D01出土資料がある。S D01は寺域を区画する築地の南東角の北側溝にあたり、出土遺物として須恵器・土師器のほか紀年銘木簡がある。土師器には底部ヘラ切りのもの、ヘラ切り後不定方向にヘラ削りをするものがあり、回転台成形によると考えられる。内面および外面に暗文を施すものがある。これらは相対的に律令的な土器様相を示す。紀年銘木簡には「天平神護三年」(767年)、「神護景雲二年」(768年)銘のものがあり、出土土器の年代は8世紀後半と考えられる。

出石町袴狭遺跡^(注22)は、出土木簡の紀年銘から延暦23(804)年に移転する以前の但馬国府および出石郡衙が所在していたと推定されている。内田1区出土土器は、平安時代前期の木簡と共伴しており、その様相は後述する横枕遺跡谷部下層出土土器の様相と類似している。ほぼ同時期の資料と考えられる。

日高町深田遺跡^(注23)では、窪地の堆積土を層位ごとに取り上げた土器資料がある。一括資料として良好とはいえないが、紀年銘木簡を伴うことから、重要と考えられる。下層の黒灰色シルト出土土器には、須恵器・土師器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・無釉陶器などがある。須恵器には皿・杯A・杯B・杯蓋・稜碗などがある。土師器には杯・皿がある。基本的に回転台成形で、底部はヘラ切りである。赤彩を施す。都城の土器を模倣して暗文を施すものが数点ある。黒色土器には碗・杯があり、在地系のものと同畿内系のものに分類できる。いずれも回転台成形であるが、畿内系は器壁が薄く、貼り付け高台である。在地系は平底の杯で、口径と底径の差が大きい。1点だけであるが平高台のものがある。ただし、体部外面下半と底部外面にはケズリ調整が施される。無釉陶器は平高台の皿で、横枕遺跡出土資料と近似している。但馬国分寺跡S D01出土土器と比べると、土師器は赤彩するものの、形態・製作技法の点において都城の土器を模倣しようとする意識が薄れ、在地色が強くなる。これらは「大同五年」(810年)、「弘仁三年」(812年)などの紀年銘木簡と共伴していることから9世紀前半以降の年代が考えられる。中層の黒灰色シルト上・灰色シルト下出土土器には、須恵器・土師器・黒色土器・灰釉陶器などがある。須恵器には杯A・杯B・杯蓋などがあり、杯Bには深手のものが見られるようになる。土師器には杯と皿があり、杯には底部糸切りのものが一定量見られる。これらは「寛平七年」(895年)銘木簡が共伴していることから、10世紀初頭前後の年代が考えられる。中層の上から掘り込まれた井戸1の出土土器には須恵器・土師器がある。須恵器には杯と平高台碗がある。杯は下層の杯Aより口径と底径の差が大きく、体部が斜め上方に立ち上がる。平高台碗は見込みが大きく凹み、底部には糸切り痕が残る。土師器は杯1点で、須恵器杯と同じ形態である。

日高町祢布ヶ森遺跡^(注24)には井戸および溝出土資料がある。井戸出土土器には須恵器・土師器・白磁がある。土師器には大小2タイプの杯があり、回転台成形による。底部と体部の境を削るものとそうでないものがある。土師器の形態から深田遺跡井戸1出土資料よりも前の段階の資料と考えられる。また、白磁はI類碗と考えられ、9世紀代の年代観が得られる。

②丹後地域(京都府北部)

代表的な遺跡としては、京丹後市網野町横枕遺跡、同峰山町名地谷窯跡・名地谷遺跡^(注25)、同弥栄町縁城寺旧境内隣接地遺跡、同久美浜町女布北遺跡^(注27)、宮津市日置北遺跡^(注28)、舞鶴市倉谷遺跡^(注29)・同浦入遺跡群^(注30)などがある。

ここでは松尾が報告した横枕遺跡を中心に丹後地域の概要を述べる。横枕遺跡は官衙関連遺跡と考えられ、須恵器・土師器・黒色土器のほか、施釉陶器、輸入陶磁器などが出土している。出土遺物は谷部埋土からの出土であるため、一括資料としては良好とはいえないが、当該期の資料が乏しいことから重要な資料と認識される。

谷部下層出土土器は以前論^(注31)じたように8世紀後半から9世紀中頃と考えられる資料である。土師器は回転台成形の杯で、①都城の土師器を模倣したものと、②平底で体部が湾曲して斜め上方に立ち上がるものがある。後者は底部ヘラ切りで、底部と体部の境を削る。また、大小の法量分化があり、一部赤彩を施す。須恵器には杯B・杯蓋があり、杯Bには深手のものも見られる。9世紀代の緑釉陶器が出土する。日置北遺跡出土の土師器にも大小の法量分化が見られるが、底部と体部の境の削りが無いことから、谷部下層から中層にかけての時期にあたと考えられる。

谷部中層出土土器は9世紀中頃から10世紀後半と考えられる資料である。土師器では底部ヘラ切りの杯と底部糸切りの杯・碗が共伴し、須恵器碗や黒色土器碗の出土比率が高くなる。このように糸切り技法の導入と碗形態の出現がこの段階の特徴である。土師器杯は谷部下層にみられた大型品がなくなり、小型品のみとなる。土師器、黒色土器および須恵器の碗はいずれも底部糸切りの平高台である。この時期の須恵器碗の生産地の1つとして名地谷窯跡がある。灰釉陶器や緑釉陶器は10世紀前半を中心とする。縁城寺旧境内隣接地遺跡土器だまりおよび倉谷遺跡S D9301中層出土土器は、法量や形態からほぼ同時期のものと考えられる。

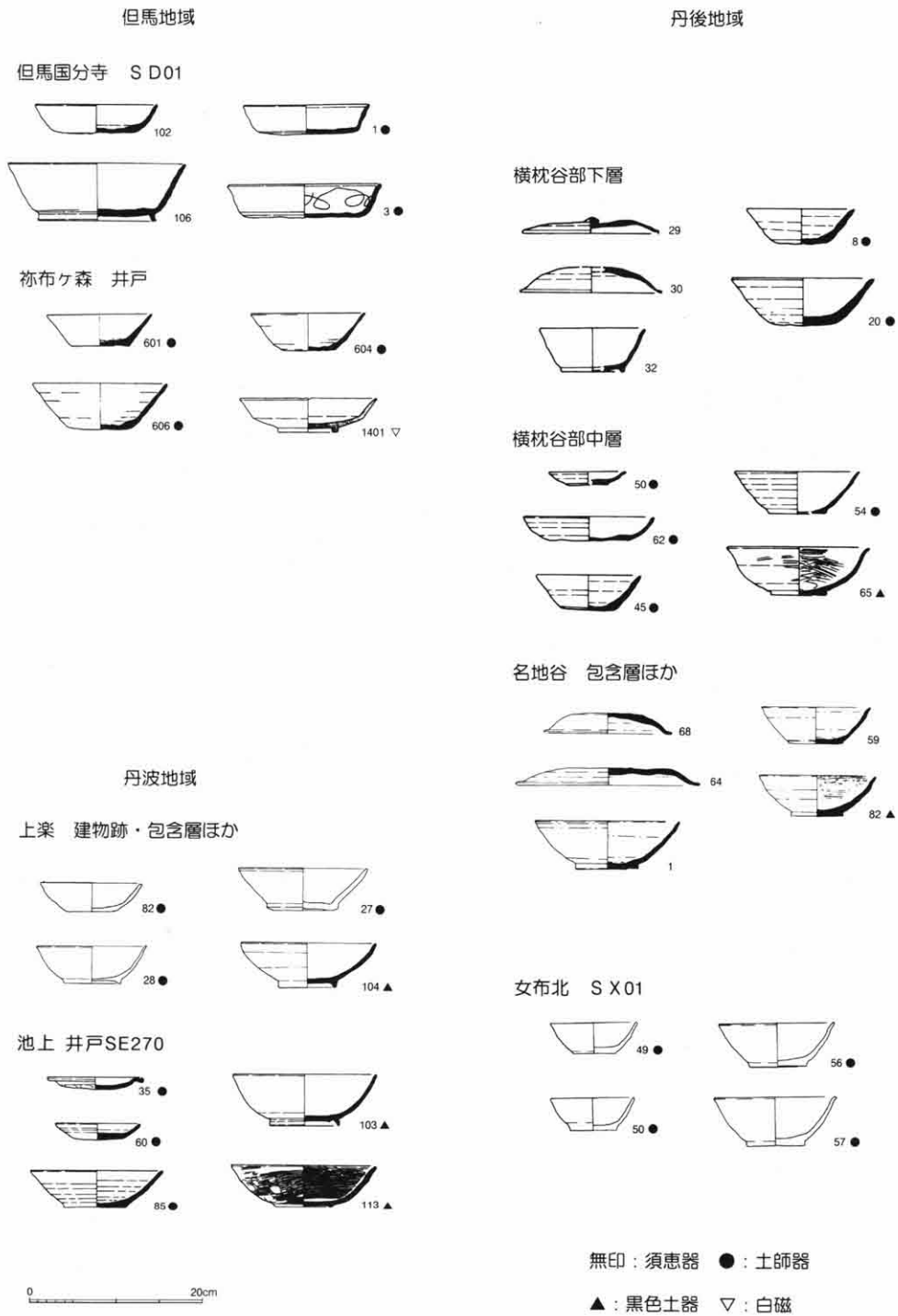
谷部上層出土土器は土師器の糸切り平高台碗・皿および黒色土器が主体となる。須恵器碗は減少するものの一定量出土する。土師器の法量は谷部中層よりさらに縮小する。土器様相としては京丹後市網野町林遺跡黒色土上層出土土器^(注32)と近いことから11世紀代のものと考えられる。同時期のものとして、女布北遺跡S X01出土の土師器と黒色土器がある。土師器には底部糸切り杯と碗があり、杯の法量は縁城寺旧境内隣接地遺跡土器だまり出土資料より小さくなる。宮津市成相寺旧境内出土資料^(注33)も法量からほぼ同時期のものと考えられる。

前述のように土師器杯の法量はしだいに縮小していく傾向にあることから、女布北遺跡S X01および成相寺旧境内出土資料は、横枕遺跡谷部上層土器群と併行するものと考えておきたい。

③丹波地域(京都府中部・兵庫県中部)

丹波地域については京都府内の出土資料を中心に概観する。代表的な資料としては福知山市上楽遺跡・綾部市青野西遺跡・同味方遺跡・亀岡市篠窯跡群・八木町池上遺跡出土土器がある。

上楽遺跡・青野西遺跡出土の土師器は回転台成形で、杯・椀が主体である。底部には糸切り痕を残し、椀は平高台で、見込みの凹みが明瞭なものとそうでないものがある。^(注38) 黒色土器椀は、底部糸切りの平高台と貼り付け高台の2タイプがある。須恵器は出土量が少ない。



第3図 北近畿地方主要土器実測図
(番号は報告番号、土器の配列はおおよその時間的な推移および併行関係を表す)

篠窯跡群では平安時代前・中期の須恵器のほか、緑釉陶器およびその素地である無釉陶器を生産している。

池上遺跡井戸 S E 270では在地系の回転台土師器と京都系土師皿が共伴している。在地系回転台土師器の主体が杯・皿で椀が少ないこと、杯の器高が低く、口径に対する底径の比率が小さいことから上楽・青野西両遺跡出土土器よりも後出すると考えられる。須恵器の出土量は少ない。土坑 S K 271出土の黒色土器椀には①回転台成形で底部糸切りの平高台のもの、②同じく回転台成形で貼り付け高台のもの、③手づくねで畿内に通有な形態の3タイプがある。これらは京都系土師皿の年代観から10世紀末ないし11世紀初頭の資料と考えられる。

味方遺跡出土資料は土師器が主体で、黒色土器が少量見られる。須恵器はほとんどない。土師器は回転台成形で、皿と杯がある。杯は器高が低く、口径に対する底径の比率は池上遺跡出土土器よりも小さい。椀形態もみられないことから、池上遺跡よりも後出すると考えられる。黒色土器には椀・皿があり、椀は糸切り平高台である。これらは共伴する白磁の年代観から11世紀後半～12世紀の資料と考えられる。

(松尾史子)

c. 北陸地方(若狭・越前)

北陸地方のうち、旧国名でいうところの若狭・越前の2地域を取り上げる。若狭地域では当該期の代表的な遺跡の多くは製塩遺跡であり、官衙や集落遺跡などはあまり多く知られていない。また、越前地域も、当該期の遺跡の調査例はあまり多くない。

①若狭地域(福井県西部)

大飯町吉見浜遺跡^(注39)は製塩遺跡として知られている。検出された遺構は製塩関連遺構を中心とするが、遺物は製塩土器のほか、弥生時代から古代に至るまで遺物が出土している。遺物は大半が包含層出土であるが、本稿との関わりでは平安時代中期頃に位置づけられる土器が出土している。これには、須恵器・土師器・黒色土器・施釉陶器などのほか、製塩土器がある。土師器は底部糸切りの杯や椀類がある。須恵器には底部糸切りの椀や杯のほか、高台のやや高めの椀形態を呈するものがある。前者は丹後地域で、後者は越前地域でよく見られる器形である。黒色土器は小破片が多いが、畿内系の搬入品もしくは模倣品と考えられる椀がある。施釉陶器には灰釉陶器と緑釉陶器がある。製塩土器は、当遺跡の出土資料を標式とする吉見浜式の支脚と容器がある。以上の土器の年代観については丹後・若狭両地域における研究成果からおおよそ10世紀代(それも前半代か)と考えられる。

小浜市西縄手下遺跡^(注40)は古墳時代から平安時代にかけての遺跡である。平安時代の遺構としては掘立柱建物跡、土器溜まりなどがあり、土器溜まりから大量の土器が出土している。出土土器の大半を須恵器が占める。蓋はつまみのあるものとないものがある。杯Bが多く、高台の貼り付けは、やや雑然とした作りのものが多い。杯Bのなかには椀形態に近いものも含まれている。また、無高台の浅い皿が多く見られるほか、これにやや足高の高台を有するものがある。これは灰釉陶器皿の模倣と思われる。このほか底部糸切りの椀が少量ながら存在する。黒色土器には畿内系の

無高台椀の模倣品とやや深手を呈する平高台の黒色土器椀がある。施釉陶器としては、灰釉陶器・緑釉陶器の椀や皿がある。土師器には口縁部内面に強いヨコナデを施したいわゆる「青野型甕」^(注41)がある。当遺跡では、こうした甕が多数出土しており、主体的である。

西縄手下遺跡出土土器の年代観は、出土した須恵器の様相から、おおむね9世紀代に位置づけられる。これは、灰釉陶器や緑釉陶器、畿内系黒色土器などの年代観とも矛盾しない。また「青野型甕」は丹後地域では8世紀代に消滅するのに対して、若狭地域では9世紀代まで存続していたと考えられる。

②越前地域(福井県東部)

宮崎村鉢伏窯跡群は、越前地域でも有数の須恵器窯跡群の1つである丹生窯跡群に含まれる須恵器窯群である。このうち鉢伏2・3号窯灰原からは須恵器のみが出土しており、つまみを持たない蓋や杯A・杯B・皿のほか、やや高めの高台を有する椀がある。この椀は、若狭・越前地域においてはやや特色のある器形を呈しており、報告では、詳細な検討の結果、9世紀末頃の年代観が与えられている。おそらく当該地域における年代推定の基準資料となるものである。

福井市下六条西九反田遺跡^(注43)は、顕著な遺構は検出されていないが、土器溜まりから須恵器・土師器・黒色土器・施釉陶器などが出土した。須恵器・土師器・黒色土器のいずれにもやや高めの高台を有する椀がある。底部の切り離しは、いずれもヘラ切りと考えられる。土師器杯のなかには底部糸切りのものがある。また、乾燥のためスノコ状の台に置いた圧痕が残る。同様の圧痕は、武生市村国遺跡^(注44)出土の須恵器杯にヘラ切り後であるが、同様のスノコ状の圧痕が見られる。なお、

底部の切り離し方法にヘラ切りのものと糸切りのものがあるので、底部の切り離し手法が変化する過渡的段階に相当すると考えられる。黒色土器椀は、報告例以外に、底部糸切り後にその周囲に高台を貼り付けるものがある。これらは北近畿地方でも確認でき、量的には少ないが、他地域との交流や併行関係を考える上で注意する必要がある。また、須恵器・土師器・黒色土器のうち、椀形態を呈するものについては、灰釉陶器などの模倣である可能性が高い。ちなみに黒色土器は、現時点でこれらよりも古い資料は確認されていない。

下六条西九反田遺跡出土土器の時間的位置づけは、須恵器が鉢伏2・



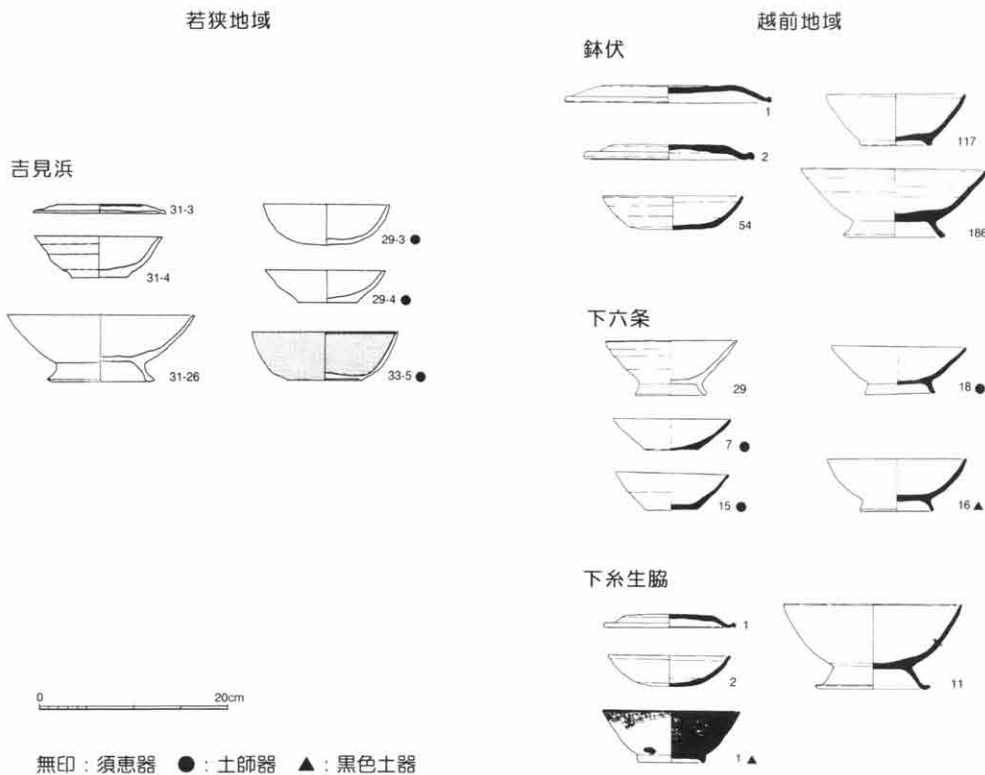
第4図 北陸地方主要遺跡分布図

- | | |
|----------|-------------|
| 若狭 | 越前 |
| 1 吉見浜遺跡 | 1 厨海円寺遺跡 |
| 2 阿納塩浜遺跡 | 2 下糸生脇遺跡 |
| 3 傾遺跡 | 3 下六条西九反田遺跡 |
| 4 西縄手下遺跡 | 4 鉢伏窯跡群 |
| | 5 光源寺遺跡 |
| | 6 北市遺跡 |
| | 7 猪野口南幅遺跡 |

3号窯灰原出土須恵器よりも後出すると考えられることから、10世紀初頭から前半代に位置づけられる。また、越前地域における黒色土器の出現もおおむねこの時期に位置づけられる可能性が高い。

朝日町下糸生脇遺跡^(注45)は、縄文・弥生・古代の各時代の遺構・遺物が検出されており、古代の遺物は必ずしも多くないが、土坑出土土器として須恵器・黒色土器がある。前者には下六条西九反田遺跡出土須恵器と同形態の蓋・杯・碗がある。須恵器碗には、下六条西九反田遺跡や鉢伏窯跡から出土しているものにくらべ一回り大きいものがある。黒色土器碗は底部の切り離しに糸切りを用いられておらず、高台も低い。高台はやや厚手の三日月状を呈し、灰釉陶器の特徴が見られる。これらの土器群は、下六条西九反田遺跡出土土器とおおむね併行関係にあると考えられる。

越前町厨海円寺遺跡^(注46)は、縄文・平安・鎌倉の各時代の遺構・遺物が確認されている。このうち、平安時代の遺物は、包含層から大量の製塩土器容器・製塩土器支脚、須恵器・土師器・黒色土器・白磁などが出土している。製塩土器には製塩に伴う支脚とその上にのせる容器がある。支脚には全長22cm前後に復原できるものと18cm前後に復原できるものがある。容器は、やや平底気味の碗状を呈し、口縁部がやや内傾するものや甕形に近い形状のものなどが確認できる。京都府舞鶴市浦入遺跡群における製塩土器の編年観^(注47)からいうと、支脚は塩浜式と浦入0-2地点式に、容器は吉見浜式に相当すると考えられる。編年的には支脚と容器が必ずしも対応しないので、今後も検討が必要である。土器では、底部に糸切り痕を残し平高台を呈する、いわゆる丹後型黒色土器碗が多数見られる。完形品はないようであるが、底部の特徴などから12世紀代のものと考え



第5図 北陸地方主要土器実測図

(番号は報告番号、土器の配列はおおよその時間的な推移および併行関係を表す)

られ、全長22cm前後の製塩土器支脚に伴うものと考えられる。このほかにも同時期の白磁片などがある。また、これらとは別に須恵器杯Bや同蓋などがあり、奈良時代から平安時代前期の土器資料も含まれている。

勝山市北市遺跡^(注48)は、竪穴式住居跡18基、掘立柱建物跡6棟などが検出されている平安時代前期の集落跡である。竪穴式住居跡を中心に須恵器・土師器・黒色土器などが出土している。このうち、黒色土器は椀・杯などがあり、これらは、①加賀地域の黒色土器と同様の製作手法に基づくもの、②おそらく加賀地域の製作手法を在地で模倣したもの、③前二者とは全く異なるもの、と大きく3形態に分類できる。③は、北陸地方西部や畿内周辺ではみられない器形を呈し、東国の影響を受けたものと推測される。須恵器は杯Bや同蓋、器高の著しく低い皿などがある。土師器は小型の貯蔵具を中心に、黒色土器と同様に、加賀系のものや東国系と思われるものがある。北市遺跡土器群は、加賀系や東国系の土器様相が強く見られる点で注意される。その年代観は、加賀系土器の年代観から10世紀代までは下らないと考えられる。

勝山市猪野口南幅遺跡^(注49)は、平安時代前期から中期にかけての集落跡である。検出遺構としては掘立柱建物跡などがある。出土土器としては須恵器・土師器・黒色土器・灰釉陶器などがある。土師器の貯蔵具については、北市遺跡で見られる加賀系のものが多く存在する。黒色土器は、北市遺跡とは異なり、むしろ福井平野など越前地域中心部の資料に近い様相を呈する。

(村田和弘・筒井)

3. 若干の検討

前章では、鳥取県から福井県までの日本海沿岸地域の土器様相について、地域ごとに概観した。以下、地方ごとの特色を簡単にまとめ、丹後地域の土器様相の特色を明らかにするとともに、丹後地域と各地域間の併行関係についても確認したい。

山陰地方東部の土器様相の推移は、8世紀代から9世紀代にかけては、いわゆる律令的な土器様相が展開していたと考えられる^(注50)。しかし、土師器生産への回転台利用も伯耆国庁跡などの資料によると、遅くとも9世紀代には導入されており、回転台成形の広がりとともに、律令的な土器様相は崩れていく。9・10世紀代を通じて土師器は、一般に貼り付け輪高台を有しており、10世紀後半以降無高台杯が増加する。須恵器は10世紀前半代までは生産されていたが、その後、生産を停止したと考えられる。一方、10世紀代以降に新たに黒色土器が出現する。これは畿内地域の模倣品からやがて在地化するものと考えられる。しかし、11世紀初頭以降、12世紀中頃まで、土器様相は資料の不足もあって不明な点が多い。丹後地域との併行関係が推定できる資料は少ないが、器形上の特徴などから、山ヶ鼻遺跡S K 14Ⅲ期の資料が縁城寺旧境内隣接地遺跡や丹波地域上楽遺跡出土資料と、同Ⅳ期の資料や上淀廃寺出土資料が女布北遺跡出土資料に類似すると考えられる。また、山ヶ鼻遺跡S K 14のⅤ期の資料や秋里遺跡柱穴出土の土師器鍋は、丹後地域において出土するものに類似しており、併行関係にあると考えられる。

次に北近畿地方の土器様相は、8世紀代には律令的な土器様相を呈していたが、9世紀前半代

には土師器に回転台成形が導入され、形態も在地色の強いものになっていく。そして、10世紀代には土師器・須恵器ともに糸切り平高台碗が出現し、土器様相は在地化する。土師器は法量がしだいに縮小し、底部に糸切り痕を残すものが主体となる。また、丹波地域では10世紀代には碗・杯が主体であったのが、11世紀代には皿・杯が主体になる傾向がある。杯の形態については、口径は大きくなるが口径に対する底径の比率が小さくなり器高は低くなる。須恵器生産は亀岡市篠窯跡では、少なくとも11世紀初頭まで行われており、丹後地域でも同時期まで行われていた可能性がある。さらに11世紀代になると、底部糸切り平高台の黒色土器碗が主体となる。

北近畿地方の3地域の土器様相における共通点として、土師器は回転台成形であること、土師器・須恵器・黒色土器碗は糸切り平高台が主体であることなどが挙げられる。なお、但馬地域は10世紀代以降の資料が著しく少なくなるが、土器様相の展開はおおむね丹後地域と同様と考えられ、但馬地域出土の紀年銘資料群は丹後地域の土器様相の暦年代を知る上で重要な資料と考えられる。一方、丹波地域では南部の篠窯跡群や池上遺跡で、平安京出土資料などとの比較が可能である。また、北部では、上楽遺跡や青野西遺跡出土土師器と播磨地域で生産された須恵器が形態上類似しており、同地域の年代観を援用することが可能である。さらに、丹波地域は12世紀代以降、瓦器碗の分布地域になるため、瓦器碗と丹後型黒色土器碗の共伴資料なども増えてくる。

北陸地方西部の土器様相は、山陰・北近畿両地方に比べ、不明な点が多い。まず、8・9世紀代は他の地方と同様に律令的な土器様相が展開したと考えられる。9世紀末頃ないし10世紀代になると、やはり他の地域同様在地色が顕在化してくる。この地域の特色としてはやや高めの高台を有する須恵器碗や貼り付け輪高台の黒色土器碗などの存在が挙げられる。しかし、10世紀代以降の土器様相の展開については資料の不足もあって不明な点が多い。丹後地域との併行関係を示す資料としては、吉見浜遺跡出土資料があるにすぎない。ただ、この資料を通じて越前地域の出土資料と、間接的にはあるが、併行関係をうかがうことができる、

以上の3地方の土器様相を比較すると、丹後地域を中心とする北近畿地方の特色が明らかになる。まず、各地における須恵器生産の衰退、停止をみると、丹後・丹波地域が比較的遅くまで(10世紀末頃)須恵器生産を行っている可能性が高い。これは、播磨地域などにおける古代須恵器生産窯の終焉が10世紀末ないし11世紀初頭頃であることと無関係ではあるまい。また、10世紀代に多く見られる平高台は、播磨地域などの須恵器生産窯の例を除くと、他地域では例が少ない。周辺地域ではすでに指摘しているように貼り付け輪高台を主体とする。ただ、土師器生産にも回転台が導入されると、底部糸切りの無高台杯が各地で増加する。

以上のような平高台の土器が主体的に存在する状況は、土器生産における回転台の使用と糸切りによる切り離しとともに、丹後地域の土器様相を特色づけるものと考えられる。この特色は、11～13世紀の黒色土器生産まで受け継がれていく。

4. 小 結

本稿では、周辺地域の土器様相との比較を通じて丹後地域の特色を明らかにした。次号では、

丹後地域の土器様相を特色づけている回転台土師器や須恵器碗、黒色土器碗について検討を加え、その変遷を明らかにする作業を行うことにしたい。

(筒井・村田・松尾)

(つつい・たかふみ=当センター調査第2課調査第3係調査員)

(むらた・かずひろ=当センター調査第2課調査第1係調査員)

(まつお・ふみこ=京都府文化財保護課技師)

注1 以下、〇〇地域という場合は、いずれも旧国の範囲にもとづく。

注2 これまでの丹後地域における平安時代の土器に関する研究成果としては以下のようなものがある。

高橋美久二「丹後地方の平安時代土器」(『京都考古』第25号 京都考古刊行会) 1976、高橋美久仁「歴史時代の土器」(『林遺跡発掘調査報告書』(『網野町文化財調査報告』第1集) 網野町教育委員会) 1977、杉原和雄「丹後地方の黒色土器について」(『中上司遺跡発掘調査報告書』(『加悦町文化財調査報告』第2集) 1979、竹原一彦「丹後における黒色土器について」(『京都府埋蔵文化財論集』第1集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987、松村英之「中世土器の諸問題」(『滝岡田古墳』(『加悦町文化財調査報告』第22集) 加悦町教育委員会) 1995、松尾史子「丹後地方の平安時代の土器」(『中近世土器の基礎研究』XV 日本中世土器研究会) 2000、松尾史子「丹後地方の回転台土師器」(『京都府埋蔵文化財論集』第4集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001

注3 鳥取県教育委員会『因幡国府遺跡発掘調査報告書』I～VIII 1973～1980

注4 須恵器・土師器の器種名称は原則として奈良文化財研究所が設定されているものを使用する。ただし、名称のない器種・器形についてはその都度表記する。

注5 本稿で使用する時期区分は主に土器様相からみたものである。実年代とはおおむね次のように対応させる。平安時代前期≒9世紀代、平安時代中期≒10世紀代、平安時代後期≒11世紀代、中世前期≒12世紀代

注6 谷口恭子ほか『山ヶ鼻遺跡II』((財)鳥取市教育振興会) 1996

注7 山田真宏ほか『岩吉遺跡IV』((財)鳥取市教育振興会) 1997

注8 中野知照『山田窯跡群』(郡家町教育委員会) 1987

注9 横島勝則ほか『縁城寺旧境内隣接地遺跡発掘調査報告書』(『京都府弥栄町文化財調査報告』第13集 弥栄町教育委員会) 1998

注10 永谷隆夫「上楽遺跡(猪崎地区)発掘調査」(『福知山市文化財調査報告書』第33集 福知山市教育委員会) 1997

注11 水野正好・中原齊・岩田文章ほか『上淀廃寺』(『淀江町埋蔵文化財調査報告書』第35集 淀江町教育委員会) 1995

注12 前田均『秋里遺跡』((財)鳥取市教育振興会) 1996

S B01柱穴出土の土器碗は、内面の黒色処理が十分ではないが、形態などから、いわゆる丹後型黒色土器碗(注52参照)でよいと考えられる。ただし、胎土は在地のものようである。

注13 倉吉市教育委員会『伯耆国庁跡発掘調査概報(第3次)』・『同(第4次)』・『同(第5・6次)』 1976～1979

注14 巽淳一郎「古代窯業生産の展開」(『文化財論叢』 同朋舎) 1983

- 注15 高井悌三郎・今泉隆雄ほか『但馬国分寺木簡』（『日高町文化財調査報告書』第5集 日高町教育委員会）1980
- 注16 前掲注14巽論文で、S D35型式として図示されている土器は、4次報告においてⅡ期濠出土とされるものである。5・6次報告のなかで、巽氏自身がS D35出土土器とS K05出土土器の類似性を指摘しておられる。したがって、5・6次報告における巽氏の見解や注15文献の図からS D35型式はⅡ期濠出土遺物に代表されるべきであり、またS D35出土土器はS K05型式に含まれるべきであると考ええる。
- 注17 松尾史子「横枕遺跡第2次発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第82冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）1998
- 注18 佐藤興治『伯耆国分寺跡発掘調査報告Ⅰ』（倉吉市教育委員会）1971
- 注19 注11文献128頁参照
- 注20 湯村功ほか『米子城跡6遺跡』（『鳥取県教育文化財団調査報告書』44（財）鳥取県教育文化財団）1996、湯村功ほか『米子城跡21遺跡』（『鳥取県教育文化財団調査報告書』56（財）鳥取県教育文化財団）1998
- 注21 中森祥ほか『古市遺跡群3』（『鳥取県教育文化財団調査報告書』78（財）鳥取県教育文化財団）2002
- 注22 鈴木敬二ほか『袴狭遺跡』（『兵庫県文化財調査報告書』第197冊 兵庫県教育委員会）2000
- 注23 吉識雅仁『深田遺跡・カナゲ田遺跡』（『兵庫県文化財調査報告書』第99冊 兵庫県教育委員会）1991
- 注24 櫃本誠一ほか『但馬・祢布ヶ森西遺跡調査報告書』（『日高町文化財調査報告書』第2集 日高町教育委員会）1976
- 注25 細川康晴「名地谷窯跡」（『埋蔵文化財発掘調査概報(1998)』 京都府教育委員会）1998
- 注26 岸岡貴英「名地谷遺跡第2次」（『埋蔵文化財発掘調査概報(1999)』 京都府教育委員会）1998
- 注27 筒井崇史「女布北遺跡」（『京都府遺跡調査概報』第60冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）1994
- 注28 中畷陽太郎『日置地区第3次発掘調査概要』（『宮津市文化財調査報告』第10集 宮津市教育委員会）1985
- 注29 松本達也『倉谷遺跡第2次発掘調査概要報告書』（『舞鶴市文化財調査報告』第23集 舞鶴市教育委員会）1994
- 注30 田代弘・筒井崇史ほか『浦入遺跡群』（『京都府埋蔵文化財調査報告書』第29冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）2001、吉岡博之・松本達也ほか『浦入遺跡群発掘調査報告書 遺構編』（『舞鶴市文化財調査報告』第33集 舞鶴市教育委員会）2001、吉岡博之・松本達也ほか『浦入遺跡群発掘調査報告書 遺物編』（『舞鶴市文化財調査報告』第36集 舞鶴市教育委員会）2002
- 注31 注2松尾文献参照
- 注32 高橋美久二ほか『林遺跡発掘調査報告書』（『網野町文化財調査報告』第1集 網野町教育委員会）1977
- 注33 中畷陽太郎「成相寺旧境内地出土の土器」（『中近世土器の基礎研究』Ⅷ 日本中世土器研究会）1992
- 注34 引原茂治「青野西遺跡第4次発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第34冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）1989

- 注35 近澤豊明「味方遺跡第3次発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第19集 綾部市教育委員会) 1993
- 注36 石井清司ほか『篠窯跡群Ⅰ』(『京都府遺跡調査報告書』第2冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1984、岡崎研一ほか『篠窯跡群Ⅱ』(『京都府遺跡調査報告書』第11冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1984
- 注37 中川和哉ほか「池上遺跡第5次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第91冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2000
- 注38 兵庫県春日町中山窯跡では見込みの凹みが明瞭な糸切り平高台の椀が焼成されている。種定淳介「丹波・中山窯跡出土の須恵器」(『中近世土器の基礎研究』V 日本中世土器研究会) 1989
- 注39 森川昌和・大森宏ほか『吉見浜遺跡』(大飯町教育委員会) 1974
- 注40 小浜市教育委員会調査。正式報告はまだである。
- 注41 石崎善久「『青野型甕』について」(『京都府埋蔵文化財論集』第3集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996
- 注42 水村伸行『鉢伏2・3号窯址灰原発掘調査概報』(『福井県教育庁埋蔵文化財調査センター所報』3 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター) 1990
- 注43 山口充「下六条西九反田遺跡」(『六条・和田地区遺跡』(『福井県埋蔵文化財調査報告』第11集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター) 1987
- 注44 注42文献 55～56頁参照。
- 注45 赤澤徳明・奥村牧弘ほか『下糸生脇遺跡』(『福井県埋蔵文化財調査報告』第47集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター) 1999
- 注46 鈴木篤英・山本孝一「厨海円寺遺跡」(『年報』10 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター) 1996
なお、出土製塩土器については舞鶴市教育委員会松本達也氏からご教示を得た。
- 注47 田代弘「製塩土器」(前掲注33田代・筒井ほか文献 115～123頁)
- 注48 勝山市教育委員会調査。正式報告はまだである。
- 注49 宝珍伸一郎・松村英之ほか『猪野口南幅遺跡』(『勝山市埋蔵文化財調査報告』第13集 勝山市教育委員会) 2000
- 注50 西に位置する出雲地域では、8世紀代から底部糸切り手法など独自の様相がみられ、伯耆・因幡両地域も少なからず、その影響を受けた可能性が高いが、本稿では十分に検討できなかった。
- 注51 石井清司「篠窯の実年代」(『京都府埋蔵文化財論集』第4集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001
- 注52 12世紀代を中心に丹後地域に広く分布する底部糸切り平高台で内面のみを黒色処理した黒色土器椀をさす。一部は丹後周辺地域に及ぶ。しかし、その出現時期や変遷については、注2文献にあるような成果にかかわらず、なお不明な点が多い。本稿における今後の検討課題の1つである。
- 注53 兵庫加古川市札馬古窯跡群、同三田市相野窯跡群など。

1. 門^も戸^ん古墳群

所在地 舞鶴市丸田小字門戸
調査期間 平成16年4月22日～6月10日
調査面積 約60m²

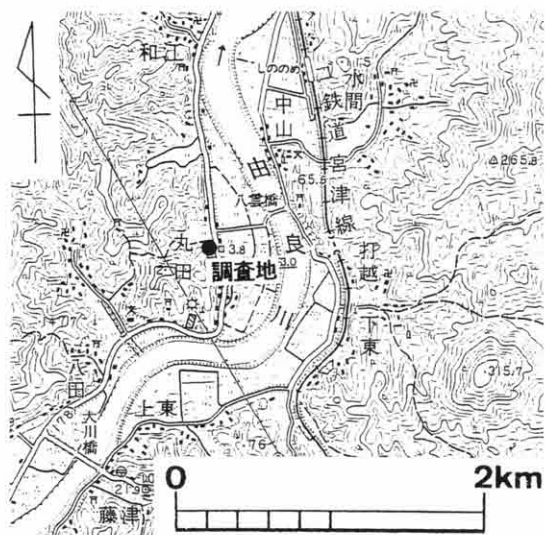
はじめに この調査は、国道178号線交通安全施設建設に伴うもので、京都府土木建設部の依頼を受けて実施した。

門戸古墳は河口から約5.5km上流の由良川左岸の丘陵上に造られた古墳群である。現地は国道175号線から分岐した国道178号線が若狭湾に向かい、由良川が最後に蛇行した地点の丸田集落の北端で、由良川に架かる八雲橋に向かう交差点の南西丘陵上にある。「京都府遺跡地図」によれば、5基の古墳が記載されている。国道178号線に接する丘陵の先端はすでに削られ崖面となっている。丘陵尾根筋に2～5号墳、すこし離れた北東斜面に1号墳が想定されている。今回は、交通安全施設建設にともない1号墳および2号墳の東半分が掘削予定地に含まれるため調査を実施した。

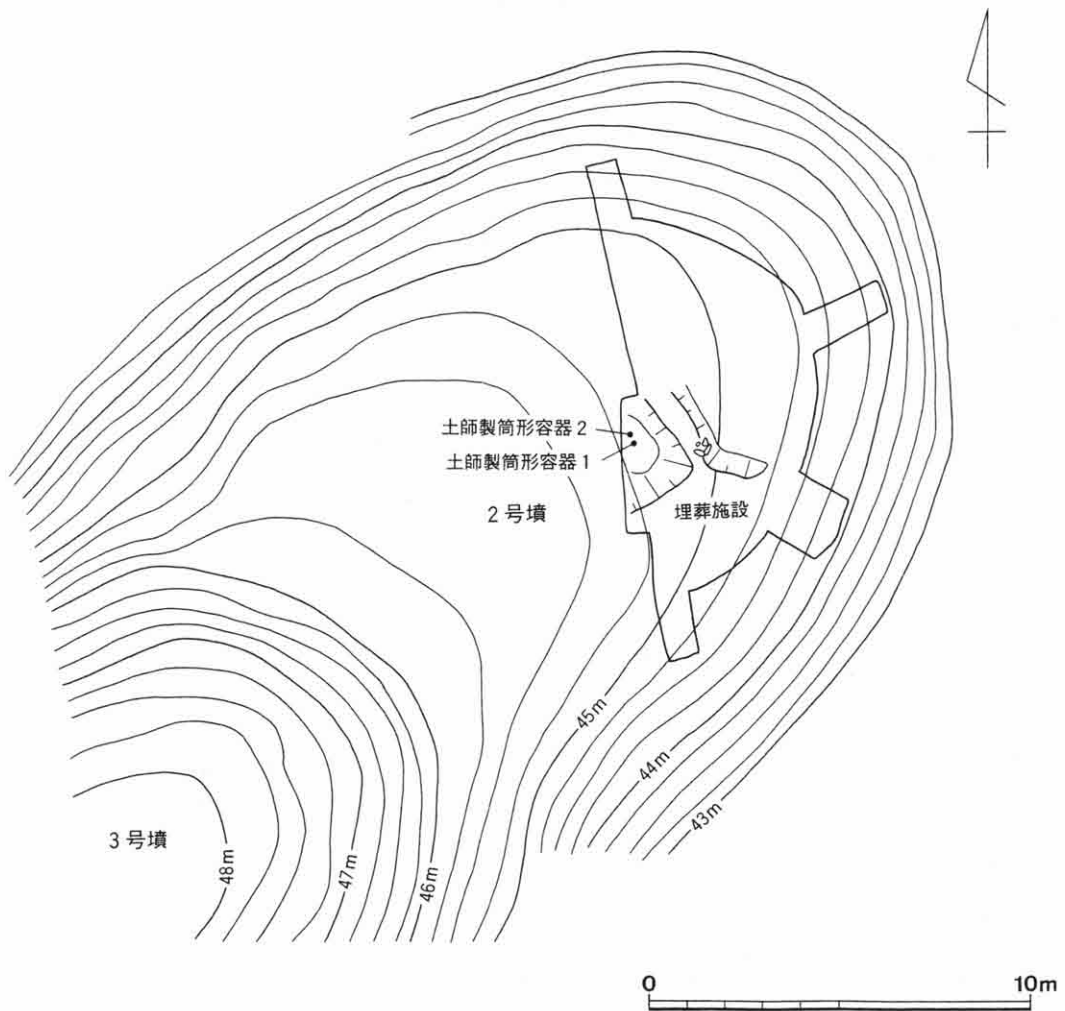
調査概要 調査は、丘陵上の2号墳推定地(A地区)、北東斜面の1号墳(B地区)、民家に近い南東部平坦地(C地区)の伐採作業の後、各地区の試掘調査を行った。各地区の状況は以下のとおりであった。

A地区では埋葬施設の一部が検出され、埋土から弥生土器が出土した。西側を拡張したところ、埋葬施設上層で土師製筒形容器、蓋に使用された土師器皿が出土した。木根による攪乱で規模は不明であるが、出土遺物から経塚が存在していたことが判明した。2号墳の埋葬施設は丘陵主軸にはほぼ直行して造られ、幅1.9m以上、長さ2.1m以上、南端の最も高く残りの良い地点(地山面)から底面まで約1.0mを測る。B地区では、地山面まで掘削したが遺構・遺物とも検出しなかった。C地区では、電柱・近世墓残欠を検出した。近世墓は幅約0.9m(3尺)四方で、深さ約0.3mを測る。近世墓から寛永通宝が出土した。近所の人によれば、この平坦地付近は、明治末期頃まで墓地であったが、丸田地区の集団墓地造成にともない、改装・移転を終了したと言われている。

まとめ 今回の調査で、1号墳は上位に土取り



第1図 調査地位置図(国土地理院1/50,000舞鶴)



第2図 門戸2・3号墳地形測量図・A地区平面図

痕跡が確認できるため、丘陵先端が改変された際のわずかな平坦地で古墳ではないことが判明した。2号墳は先端が改変されている可能性があるが、地形測量から、幅約11m、長さ約15mの自然地形を利用した墳丘と推定できる。先に記したとおり調査範囲の制約から、埋葬施設は幅1.9m以上、長さ2.1m以上あるが、規模は確定できない。出土遺物から(1点のみ)弥生時代後期の墳墓とみられる。上層で経塚を検出しているので、周辺にも経塚が存在している可能性が高い。また、C地区南西の平坦地や民家そばの丘陵裾に五輪塔の一部が散見されるので、周辺に中世墓などが所在した可能性が高い。

(石尾政信)

2. 木津川河床遺跡第16次

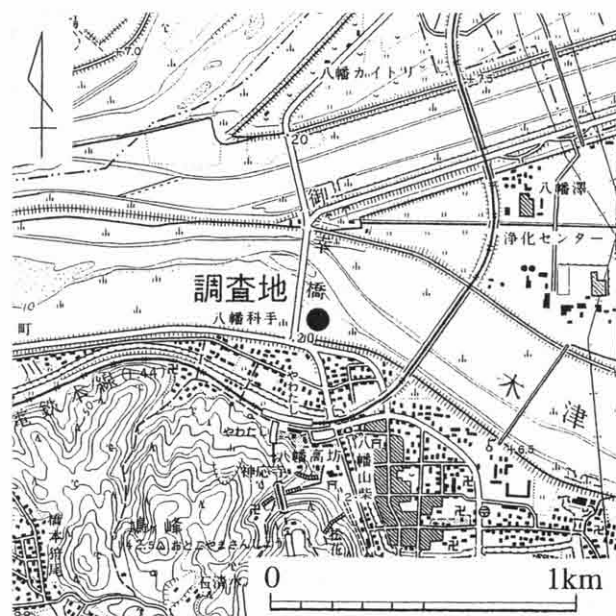
所在地 八幡市八幡科手地先
 調査期間 平成16年4月20日～6月4日
 調査面積 約260m²

はじめに 今回の調査は橋梁新設改良事業「木津川御幸橋」に伴い、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。木津川河床遺跡は八幡市の木津川流域に広がる弥生時代～近世にかけての複合集落遺跡である。現在の河床には渇水期になると井戸枠が露出し、河川敷には遺物包含層の露頭が見られ、遺物も多数採集されている。

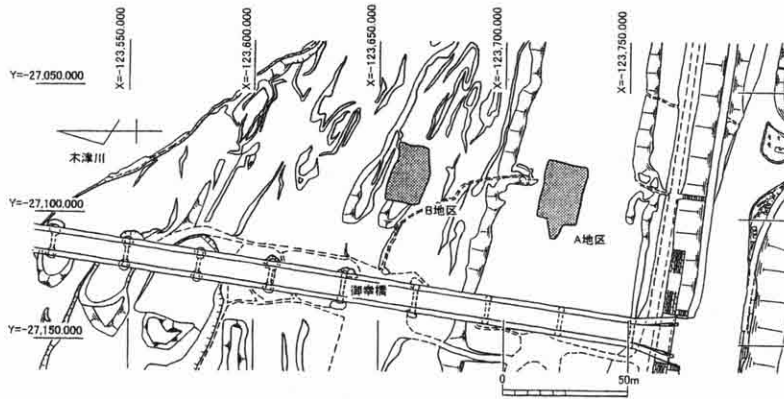
調査概要 木津川河川敷の2か所(A・B地区)の表土および砂層を重機により除去し、その後、人力掘削により遺構・遺物の有無の確認を行った。

A地区 約3m堆積した砂層を除去すると粘質土の安定面となり、遺構・遺物の有無を確認しながら精査を行った。標高約7.5mの暗灰色粘質土面で13～14世紀にかけての遺物包含層を確認した。遺物包含層は西から東へ傾斜する斜め堆積をしておりすべて周辺からの流れ込みによるものと判断した。遺物は土師器皿が大半で、そのほか須恵器・瓦器・白磁・青磁・縄目タタキの施された瓦片などがある。調査の最終段階で標高約7mまで重機により掘削を行ない下層の状況を確認したが、遺構の検出には至らなかった。

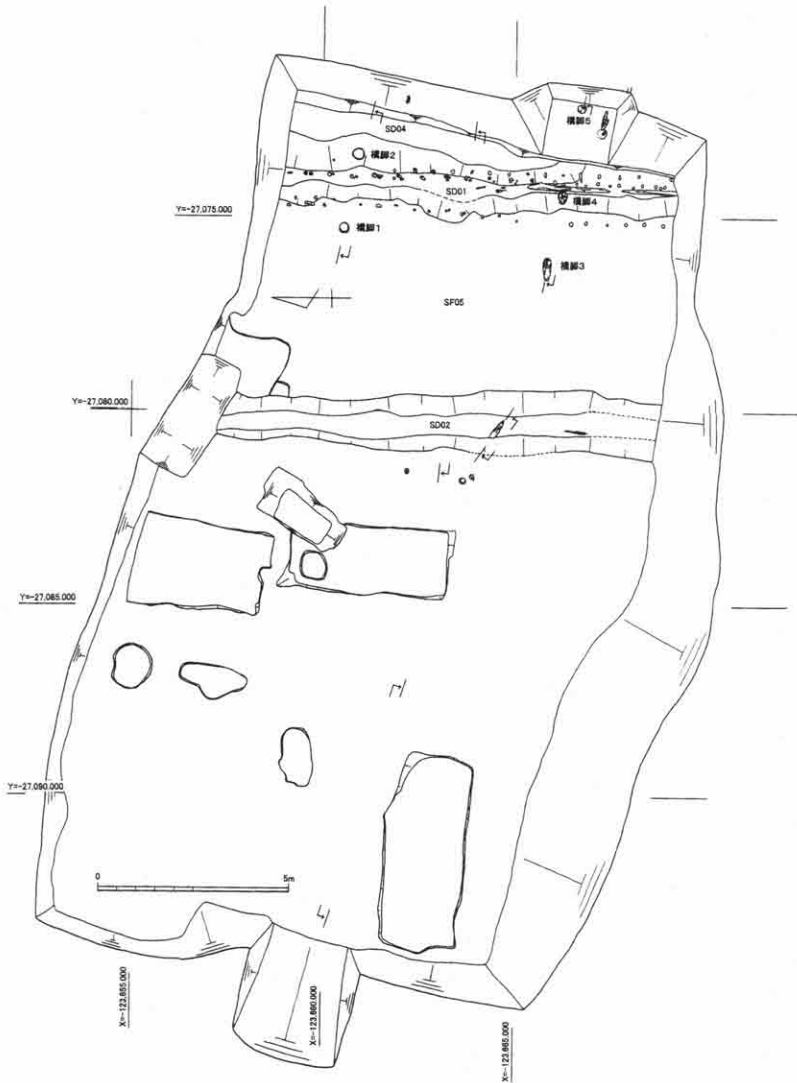
B地区 平均で約1.1mの砂層を除去すると遺構検出面となった。標高は約8.6mである。検出遺構は近世段階の道路状遺構と橋脚などである。道路状遺構は東側側溝の重複により2時期あり、路面幅は5.6mから4.5mへと変化している。新段階の東側溝S D01は溝の両肩部分に直径約8～10cmの杭が打ち込まれている。溝の深さは0.2mを測る。東側の杭は2列になっており外側の杭は内側の杭の寄りかかるように斜めに打ち込まれていた。内側の杭には横木が添えられていた。杭の長さは1.3～1.9mと比較的長いものを使用している。これはS D04と同じ場所に側溝を掘削しており、溝肩部の補強のため、護岸が必要であったと考えられる。古段階のS D04は深さ約1mを測る。出土遺物には土師器皿、染め付けなどの近世陶磁器などがある。西側溝S D02は幅約1.4m、深さ0.4mを測る。この溝は素掘りで護岸施設は見られない。出土



第1図 調査地位置図(国土地理院1/25,000淀)



第2図 調査地区位置図



第3図 B地区平面図

については石清水八幡宮の一の鳥居から北進する「御幸道」の延長部分の可能性がある。橋脚遺構については現在の御幸橋の直前に使用されていた木橋の可能性が考えられる。B地区のこれらの遺構の検出により近世段階の土地景観の一端を明らかにできたものと思われる。

(柴 暁彦)

遺物に備前焼のヘソ徳利がある。

橋状遺構の橋脚は5本確認した。橋脚1・2は橋柱が抜き取られ、抜き取り痕に粗砂が詰まった状態で検出した。抜き取り痕の直径は約24cm、深さは1.9mまで掘削したが、先端まで到達していない。橋脚3～5は直径約28cm、深さは2.4m以上を測る。橋柱の先端は尖らせており打込みによるものである。先端は粘質土層を打ち破り、砂層に達していた。橋の上部構造は不明であるが、橋脚は少なくとも3本以上で桁を支えていたと考えられる。橋脚の寸法は橋脚1・2の心々距離が1.8m、橋脚3・4が1.8m、橋脚4・5は2.4mであり、橋脚1・2と橋脚3・4の間隔は約5.4mを測る。

まとめ 今回の調査ではA地区で13～14世紀を中心とする遺物包含層を確認したが、遺構は確認できなかった。またB地区では近世段階の道路状遺構と橋脚遺構を確認した。道路状遺構

3. しょうにんがひら 遺跡

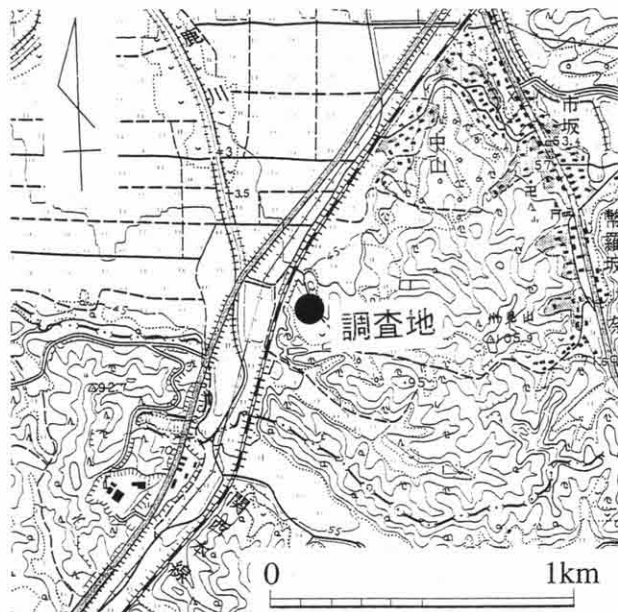
所在地 相楽郡木津町大字市坂小字上人ヶ平31ほか
 調査期間 平成16年4月19日～6月29日
 調査面積 800m²

はじめに この調査は、「関西文化学術研究都市」の整備事業に伴い、独立行政法人都市再生機構の依頼を受けて実施したものである。上人ヶ平遺跡の調査は、すでに昭和59年度から平成元年度にかけて調査を行っており、弥生時代後期・古墳時代前期の竪穴式住居跡16基、古墳時代中期から後期にかけての古墳17基・埴輪窯跡3基、奈良時代の瓦工房跡4棟とその関連遺構などを、多量の遺物とともに検出した。特に、奈良時代の瓦工房跡は近接する市坂瓦窯跡と一体のものとして捉えることができ、平城宮大膳職などに瓦を供給していたことが明らかになった。以上のような調査成果を受けて、上人ヶ平遺跡の中心部分は保存されることになった。今回の発掘調査は、先の調査の際に調査に至らなかった地点を対象として行った。調査地は、既往の調査区に挟まれるため、小型の方墳、あるいは瓦工房跡に関連する遺構などが存在する可能性が高いと判断された。

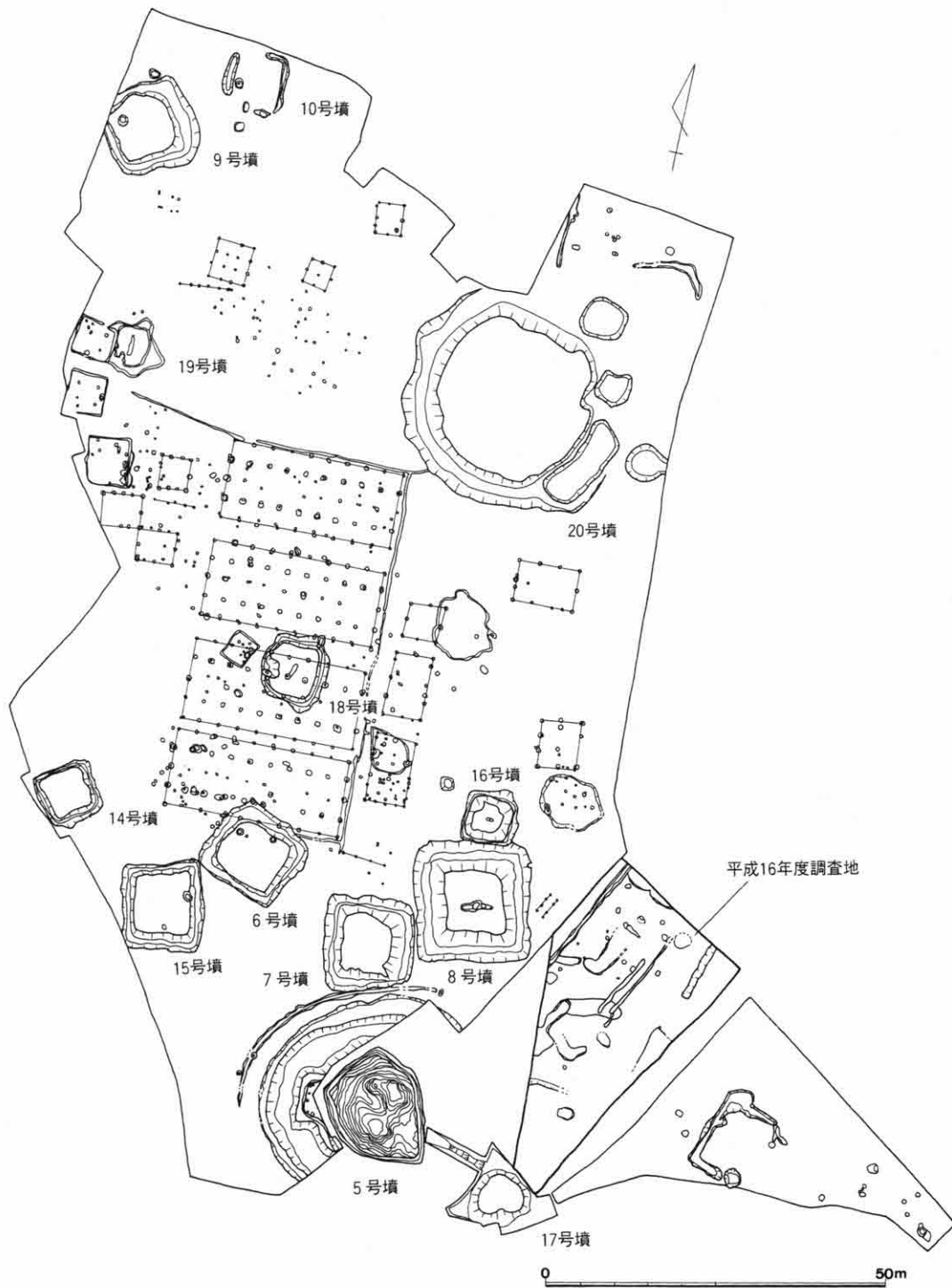
調査概要 調査の結果、当初の予想に反し、古墳あるいは瓦工房跡に関連する遺構は検出されなかった。検出した遺構としては、上人ヶ平17号墳の周溝の一部のほかは、詳細な時期が不明の溝や土坑、柱穴状の遺構などがある。

上人ヶ平17号墳周溝は調査区の南端で検出した。17号墳の墳丘は以前の調査で確認していたが、今回の調査ではその周溝の一部を確認し、周溝内に転落した埴輪片が出土した。周溝の外堤側はすでに削平されており、確認できなかった。

周溝内から出土した遺物には、円筒埴輪、馬形埴輪、土師器・須恵器などの破片がある。なお、17号墳では、昭和63年度の調査で馬形埴輪が出土しており、今回出土した馬形埴輪の破片もこれと同一のものと考えられる。溝SD123は、おおむね東西方向にのびる溝である。長さ3.6m、幅1.3m、深さ10～15cmを測る。検出位置から上人ヶ平8号墳の周溝の排水溝のような機能をもつ可能性が考えられる。以上のほか、溝SD118・130、土坑SK106・SK136などを検出したが、古墳または瓦工房に関係するかどうかはいずれも不明である。



第1図 調査地位置図(国土地理院1/25,000奈良)
 ※地図は昭和51年発行のもので、現在の地形と異なる。



第2図 上人ヶ平遺跡遺構配置図

まとめ 今回の調査では、顕著な遺構はほとんど検出されなかった。しかし、薄く形成された遺物包含層やごくわずかな遺構からは、古墳時代の埴輪や奈良時代の遺物(瓦・須恵器など)が出土した。ある程度後世の削平を受けていると考えられるが、上記のような状況から、今回の調査地周辺は、もともと明確な遺構が形成されていなかったと考えられる。なお、出土遺物の中にはサヌカイト製の石器や剥片など、縄文・弥生時代の遺物も散見されることを付け加えておきたい。

(筒井崇史)

99. 奈具遺跡群

1. はじめに

奈具遺跡群は京都府京丹後市弥栄町奈具に所在する丹後半島を代表する弥生時代中期の大型集落である。ここでは奈具遺跡・奈具墳墓群・奈具岡遺跡・奈具谷遺跡を総括した名称として奈具遺跡群と呼称する。

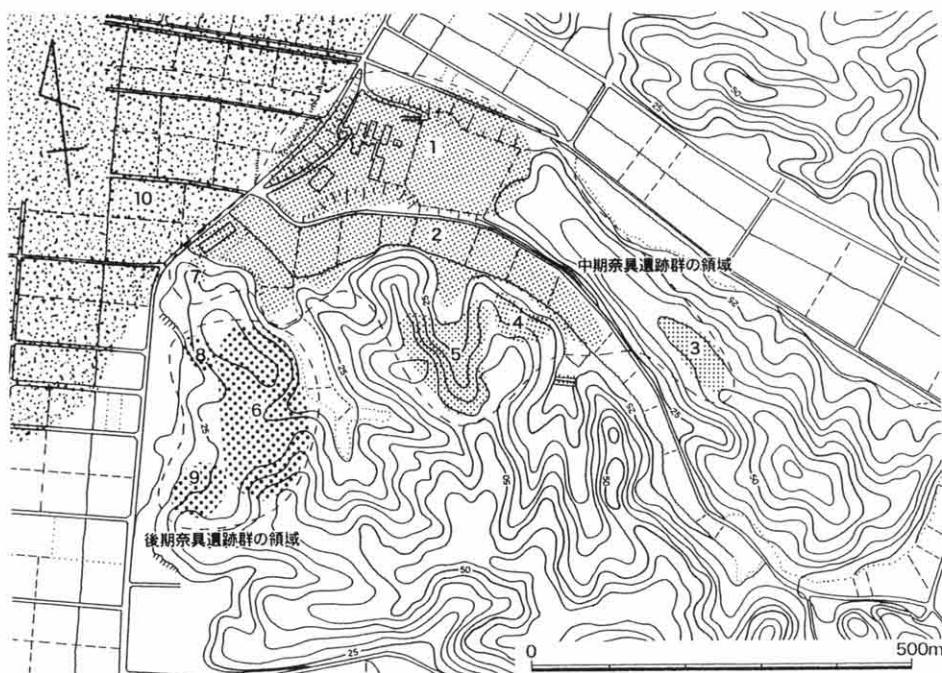
遺跡は竹野川東岸の丘陵から緩斜面を利用して営まれている。現弥栄中学校の建設工事や、丹後国営農地開発事業により発掘調査が実施され遺跡そのものはほぼ消滅してしまっている。

2. 遺跡の概要(第1図)

遺跡は南北2つに分かれた丘陵とその間に位置する谷部を利用して営まれている。北側丘陵は中期前半～後半の居住域として利用され、直径9mを測る円形竪穴式住居跡が検出されている。また、この住居埋土からは碧玉製管玉1点が確認されている。

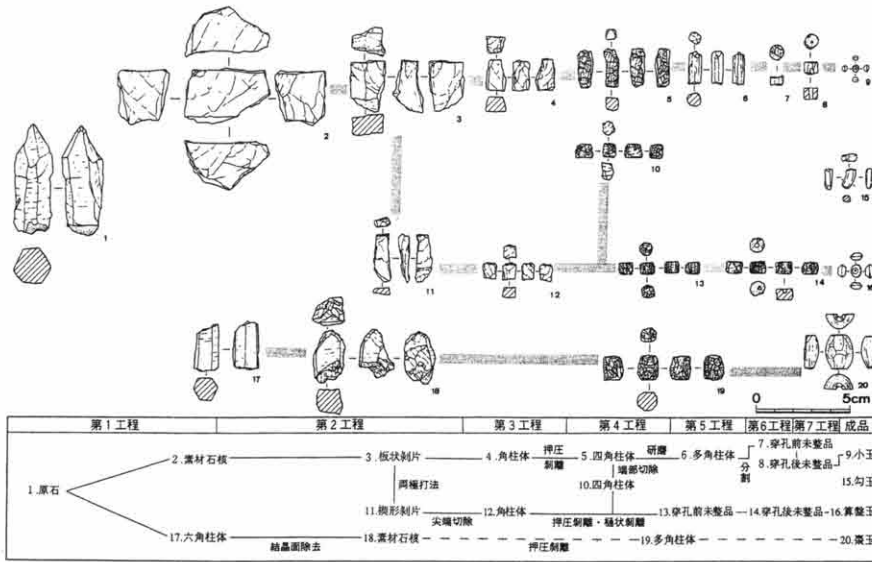
中期前半に南側丘陵の緩斜面を利用して、玉作り工房群と住居跡が総数24基確認されている。生産された玉類は緑色凝灰岩を主体とし、生産工具である石針・石鋸・砥石などが検出され、大規模な生産規模、玉類・石製工具の製作工程が明らかにされた。

谷部では、中期前半～後半に継続利用された水利施設とともにトチの実のアク抜き場が確認され弥生時代の食生活のあり方が米食主体ではないことを示唆する



第1図 奈具遺跡群の構造

- | | |
|---------------------------|-----------------------------|
| 1: 奈具遺跡(中期中葉・後半住居域) | 2: 奈具谷遺跡(中期中葉・後半水利施設・生産域) |
| 3: 奈具墳墓群(中期中葉方形周溝墓群) | 4: 奈具岡遺跡(中期中葉緑色凝灰岩玉類生産・居住域) |
| 5: 奈具岡遺跡(中期後半水晶製玉類生産・居住域) | |
| 6: 奈具岡遺跡(後期後半居住域) | 7: 奈具岡遺跡(中期後半方形貼石墓) |
| 8・9: 奈具岡遺跡(後期後半方形周溝墓) | 10: 推定水田域 |



第2図 奈具岡技法による水晶製玉作り工程図
 (河野一隆「奈具岡遺跡(第7・8次)」『京都府遺跡調査概報』第76冊
 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1997より転載)

成果が得られた。この地区では、木製高杯・槽・木づち・剣の鞘などの数多くの木製品が検出され、当時の木工技術水準の高さを示すものといえる。

中期前半代の墓域は、北側丘陵の東側に設定されており総数5基の方形周溝墓・台状墓が確認された。各台状墓は複

数の埋葬施設をもち、箱形木棺を直葬していた。突出した規模を示すものや副葬品をもつものはなく、各被葬者が当質的であるといえる。

中期後半には北側丘陵が継続して居住域として利用され、南側丘陵では玉作り工房群・住居跡群が南西の緩斜面に移動し、大規模な玉作りを展開する。この時期の玉作りの特徴として、生産品の主体が緑色凝灰岩製から水晶製に変わっている点が注目される。緑色凝灰岩からさらに硬質な水晶への素材の変化は単に材料の変化ではなく技術革新を伴うものであったと考えられる。同時期にこの地区内では、鉄製工具の加工、ガラス玉の製作などが行われている。ただし、国内における装身具消費の中心は緑色凝灰岩であり、ここで生産された水晶製玉類がどこで消費されたかは、国内外の状況を含め今後の検討課題といえる。

中期後半の墓域は玉作り工房群の周辺丘陵を利用した木棺墓や、丘陵先端部に造墓された大型方形貼石墓が確認されている。特に大型方形貼石墓は大型集落に伴って検出される例が多く、前代の方形周溝墓・台状墓とは様相を異にし、限定された階層の墓とみられる。

中期後半で奈具遺跡群は一時廃絶し、後期後半から古墳時代初頭にかけて南側丘陵に新たに居住域、方形周溝墓で構成される墓域を形成する。この時期には大規模な玉作り工房は付随せず、集落の規模も縮小しているものと考えられる。

3. まとめ

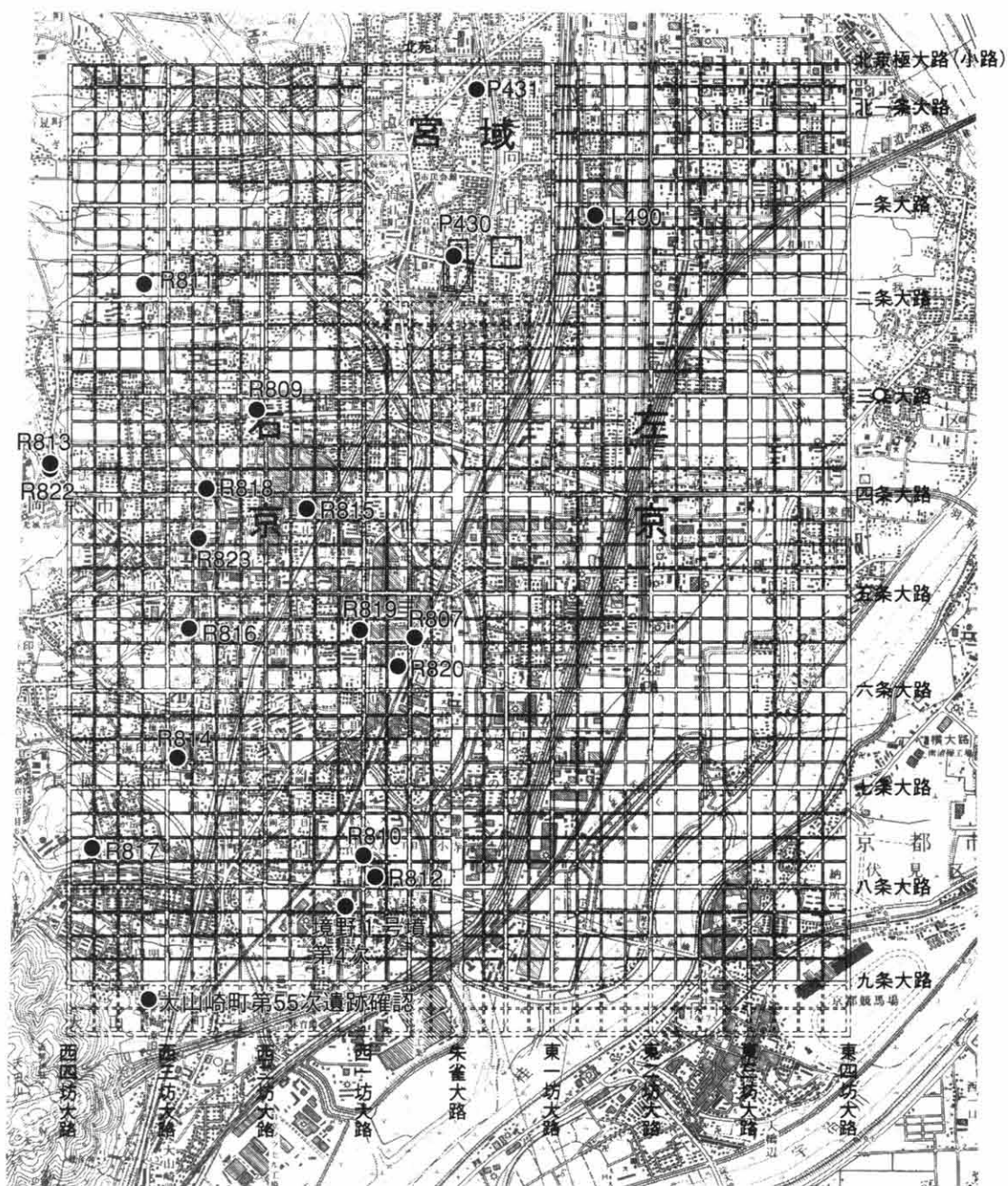
以上のように、奈具遺跡群は集落構造の把握できる丹後でも数少ない大型集落であり、中期弥生社会で起こる社会変革や技術革新を良好に示す遺跡といえる。なお、奈具岡遺跡第4・7・8次調査で出土した遺物は、平成16年度に国の重要文化財に指定された。

(石崎善久)

長岡京連絡協議会の平成16年4月27日、5月26日、6月23日の月例会では、宮内2件、左京域2件、右京域15件の調査が報告された。京域外の3件を併せると合計22件となる。

長岡京跡発掘調査抄報

宮域 大極殿前庭部で行われていた宮内第430次では、大極殿院において宝幢遺構が高い企画性の基に配置されていることと、15世紀後半期の墓塚2基の追加報告があった。戦国期の土壇墓



調査地位置図

(向日市文化財調査事務所・(財)向日市埋蔵文化財センター作成の長岡京条坊復原図に加筆)
調査地はPが宮域、Rが右京域、Lが左京域を示し、数次は次数を示す。京域外は調査名称を記した。

は、一辺1m前後の隅丸方形プランを示す逆台形断面の掘形が残り、詳細な検討の結果、火化と埋葬を同じ場所で実施している状況が明らかとなった。

左京域 宮域の東に接し、金属生産関連の現業官司の存在が想定されている地区で実施された左京第490次調査では、長岡京期の南北溝と規模の大きな掘形をもつ柱穴1基、それに先行する溝1条を検出したが、調査範囲が狭いこともあって面的な情報は得られなかった。

右京域 JR長岡京駅西口における右京第807次では、すでに報告した弥生時代から江戸時代にかけての成果に加え、さらに下層の旧石器時代の調査内容と、弥生時代の銅剣についての補足報告があった。銅剣については、この地域の弥生時代中期の中核的集落の色彩が強くなりつつある神足遺跡の、居住域を限る環濠の外側(西と北)に展開する方形周溝墓を主体とする墓域において出土したこと、出土個体は鋒から長さ約15cmの剣身上半部で、幾重に研磨され本来の形状を失うものの、細形～中広形銅剣の範疇で捉えうること、庄内期の土器資料を伴う溝から刃部を天地にしてほぼ水平を保って出土したこと、などが明らかとなった。銅剣の埋納時期については、個体の型式的な年代観から弥生時代中期後葉とみるのがふさわしいが、出土層位は庄内期の溝埋土中であり、製作・入手から埋置に至までの伝世も含め検討課題が残った。京域の北西端に位置する右京第811次調査では、井ノ内古墳群に関わる遺構の検出が期待されたが、調査の結果、中世段階の土坑と幅2～5mの直線溝などの検出にとどまった。溝は形態的には周囲で検出されている4基の小方墳の周溝と近似するが、出土遺物の上限が中世前期を遡らないことから、古墳とは断定されなかった。乙訓地域最大規模の前方後円墳である恵解山古墳の南西側で、同古墳の外堤が想定されている地区(右京第812次調査)では、炭や焼土を混じえ、9世紀後半～10世紀初頭の緑釉・灰釉陶器、製塩土器、風字・円面硯、平城宮式軒平瓦、神功開寶などを含む多量の遺物を包含する土坑状の落ち込みが検出された。周囲の調査でも宮廷様式の食器類や瓦が出土しており第3次山城国府との関連の中で貴重な資料の追加となった。また、さらに下層から埴輪類(円筒・蓋形・家形・囀形埴輪)や8～9世紀の土器類も出土している。開田遺跡と重複する右京第819次調査では、長岡京期の掘立柱建物跡や規模の大きな井戸、完形の土器を多く納めた土坑などが検出された。調査地周辺の右京六条二坊二町では、宅地構造を知る上で新たな知見を得ることができた。右京第814次調査では、遺構密度は低いものの、炭と灰を含む平安時代前期の土器埋納土坑と、陶器編年TK217型式を上限とする土器類に混じって、金環が1点出土した土坑墓状の遺構が検出された。調査地の南約200mの地点では、古墳時代後期の7基の竪穴式住居跡が確認されており、その関連性が考えられる。

京域外 京域の北郊に位置する修理式遺跡第9・10次調査では、広大な工場敷地内にグリッドを方眼交点に設けて範囲確認調査が実施された。その結果、縄文時代後～晩期の土器を包含する溝、弥生～古墳時代にかけての水田にかかわる施設、長岡京期の東一坊大路の北側延長の東西両側溝などが検出された。東一坊大路については、南約320mの久々相遺跡でも確認されており、少なくとも京域の北限である北京極大路から北へ約770mのびていることが明らかとなった。

(伊賀高弘)

センターの動向(04.05～07)

1. できごと
5. 1 理事・監事就任、新規採用職員辞令交付(別掲)
- 6 新規採用職員辞令交付式
- 13 岡ノ遺跡第3次(福知山市)発掘調査開始
- 14 三角古墳群第2次(舞鶴市)発掘調査開始
- 18 杉原和雄常務理事・事務局長、センター南部調査現地視察
- 20～21 杉原和雄常務理事・事務局長、センター北部調査現地視察
- 26 長岡京連絡協議会(於：当センター)
- 31 職員研修(於：当センター)講師：京都府教育庁指導部学校教育課人権教育室水江尚利室長「人権研修」
6. 1 監事補助監査
- 2 木津川河床遺跡第16次(八幡市)関係者説明会
- 4 木津川河床遺跡第16次、発掘調査終了(4.20～)
- 10 全国埋蔵文化財法人連絡協議会総会(於：福島県)杉原和雄常務理事・事務局長・森下衛調査第1課長、今村正寿総務課主任出席
門戸古墳群(舞鶴市)発掘調査終了(4.22～)
- 15 企業内人権啓発推進員研修(於：京都市)安田正人総務課長出席
- 16 人権大学講座(於：キャンパスプラザ京都)森下衛調査第1課長、小山雅人調査第2課総括調査員出席
- 18 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロックOA委員会(於：京都市埋蔵文化財研究所)田中彰主任調査員出席
- 23 長岡京連絡協議会(於：当センター)
- 25 上人ヶ平遺跡(木津町)関係者説明会
- 26 第99回埋蔵文化財セミナー(於：城陽市寺田コミュニティーセンター)
- 29 第71回役員会・理事会(於：ルビノ京都堀川)上田正昭理事長、中尾芳治副理事長、杉原和雄常務理事・事務局長、石野博信、井上満郎、都出比呂志、中谷雅治、増田富士雄、上原真人、下田元美、奥野義正、小池久各理事、池田博監事出席
上人ヶ平遺跡、発掘調査終了(4.19～)
- 30 人権大学講座(於：キャンパスプラザ京都)杉江昌乃総務係長出席
7. 5 長岡京跡右京第825次(長岡京市)発掘調査開始
- 8 片山遺跡第3次(木津町)発掘調査開始
- 9 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック主催者会議(於：大阪府)森下衛調査第1課長、小山雅人調査第2課総括調査員出席
- 14 人権大学講座(於：キャンパスプラザ京都)

- ラザ京都)小池寛調査第1係長、岩松保主任調査員出席
- 16 案察使遺跡第6次(亀岡市)発掘調査開始
- 26 長岡京跡右京第829次・友岡遺跡(長岡京市)発掘調査開始
長岡京跡右京第830次・井ノ内遺跡(長岡京市)発掘調査開始
- 27 亀岡市立川東小学校教諭、時塚遺跡見学
- 28 人権大学講座(於：キャンパスプラザ京都)長谷川達調査第2課長出席
長岡京連絡協議会(於：当センター)

2. 普及啓発事業

6. 26 第99回埋蔵文化財セミナー(於：城陽市寺田コミュニティーセンター)『南山城地域の古墳の調査』：小泉裕司城陽市教育委員会主事「城陽市芭蕉塚古墳の調査」、荒川史宇治市歴史資料館主任「宇治市庵寺山古墳の調査」、岩松保当センター主任調査員「八幡市女谷・荒坂横穴群の調査」

(別掲)人事異動

5. 1 小池久理事・奥田登志男監事就任
森下衛調査第1課長、北邑靖史主査、福島孝行調査員採用(京都府教育庁から派遣)

編集後記

今年の夏は酷暑の日が続き、現場での作業は大変だったようです。本号をお届けする頃には、少しは過ごしやすくなっていることと思います。

さて、今回は論考と共同研究の2編をメインに編集を行いました。岩松氏の論考は、当センターが調査した市田斉当坊遺跡の弥生時代の井戸を素材に、土壌の理化学分析から導かれた結果と神話に残された説話を取り混ぜながら、斬新な切り口で井戸を取り巻く祭祀に迫る意欲作です。また、共同研究は、古代の日本海沿岸における土器の特色や変遷を、地域・時代を追いながら、資料の比較・検討を行っていくもので、このあと2回にわたって掲載を予定しています。両論考ともよろしく御味読ください。

(編集担当=辻本和美)

京都府埋蔵文化財情報 第93号

平成16年9月28日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961 (代)



KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER